

---

# オッサンの異世界記

焼きうどん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オッサンの異世界記

### 【Zコード】

Z0990Y

### 【作者名】

焼きうどん

### 【あらすじ】

異世界に迷い込み、そこで出会ったクワガタに殺されたオッサン。次に気が付くとオッサンはそのクワガタ（幼虫）に…。  
それからなんやかんやあって新たなる人種であるムジビトに進化したオッサンは旅に出る。  
これはオッサンが纺ぐ異世界の物語。

セクハラ紛いの言動があります。

## おっさん、クワガタに転生

気が付くとおっさんはクワガタになっていました。

あ、この場合のおっさんは「おっさん」と言つるのは一人称ね。つまり「おじさん」と「おじさん」のことを「おじさん」と言つた。十五歳離れた従妹に「おじさん」と呼ばれるから。や、最初は「おじさんじゃなくてお兄さんだよ」と訂正してたんだよ。でもさあ、なんか三十越えた辺りからどうでもよくなってきて、開き直るように「ああそうさおじさんだよ。なんなら一人称をおじさんにしちゃうぞ」と言つたらその従妹の父親、つまりはおっさんの叔父に「君がそんなんしたら本物のおじさんな俺はどうしたらいい?」って真剣な顔で聞かれたから「じゃあおっさんになります(笑)」みたにふざけたら「じゃあそれで決定ね」といい笑顔で従妹が言つた後に引くに引けなくなるところまで持つてかれて今に至るという感じ。

んで、話を戻すけどおっさんはこれでも元々人間だったわけよ。

じゃあなんで今はクワガタのかつて、よくわかんない。

でもある日ふと気付いたら森の中にいたんだ。それまで住宅街を歩いてたのにいきなりよ?

こりや白昼夢かと思つたけど妙にリアルな感触や匂いを感じた。だが夢だとこの時は思つてたんだ。だって、おっさんはまだDTな中坊の頃に同じような超リアル夢を見たことがあるからね。「あ、こんなリアルな夢は久しぶりだ」と感激してたもん。ちなみにその時の夢は思春期特有の可愛らしいエロ夢だつた。巨乳なロシア娘（ここが重要ポイント）を口説いてそのたわわなおっぱいを揉む。今でも覚えてるあの感触は現実で触れた数人の女性の胸と比べると極上だったと言わざるを得ない。

え? おっさんがリア充? 現実で女性の胸を揉んだだけで何言つてんの!

言つとくけど、ほとんど素人さんじゃないかい。ついかおつぱい  
パブだよ。いわゆるお金の関係です。

いや、結構良心的なお値段なんだよ？

諭吉ちゃんが財布からフライアウトイしてこくお風呂に比べればなん  
てこともないじゃないか。

おつと、パブの話はもういいね。

んじやクワガタになつた経緯を説明しようか。

夢だと認識しながらもおつさんは森を歩いて美人なお姉ちゃんを探  
しました。いや、夢だからこそ探したんです。深くはツツこまない  
でね。オッサンという生き物は若人と違う意味で性欲が旺盛なんよ。  
不倫してんのは大体オッサンだからね。

ちなみにオッサンと心の中でカタカナ表記するのが世の中に漫然  
と生れるおやじを表しています。

## 閑話休題

そして森の中を彷徨つていた時に出会つたのがでっかいクワガタ。  
どんだけでかいかと言つとおつさんが横になつて寝た時より幅が広  
くて、クワガタの目線があつさんくらいの高さまである。長さはお  
つさん一人が縦に寝れるくらいかな。まあ、言つてしまえばライト  
バン（車）くらいの大きさかな。

んで、「うおーでけえ……」っておつさんが感心してると、そいつ  
つたら顎を広げておつさんのことをジョッキン「しちやつた。

どこまで顎を閉じれるねんっ！ つてツツコミたくなるくらいに顎  
を閉じられたせいでおつさんは死んじゃつた。ま、幸いなことに痛  
みを感じる前に死んじゃつたから実感わかないけど。でも確かに死  
んだ。

んで、起きたらクワガタだつたわけさ。

なんでつて聞かれてもおつさんにもわかんない。ほら、あれじゃね

? 死して尚、魂だけは身体に宿っていたが、クワガタがそれを喰つたせいでその子種に魂が宿りました的な？  
うん、わかんないからこれでいいか。

おつと、説明不足だつたけどおつさんは多分おつさんを殺してくれたクワガタの子供として生まれました。なぜ多分なのかはクワガタの区別なんかつかねーよってことでご理解いただきたい。

クワガタの子供だったら幼虫じゃねーの？

と思うかもしれないが、確かに幼虫だったよ？ 生後三日田までは

……

このクワガタ異常に成長はえーの！ しかも卵は地中に産むでもなく地面の上に産んで両親が子育てまでするんだ。おかしいけどあまりに普通なんで受け入れちつた。

そしたら生後四日田の朝、起きたら蛹になつてた。

そん時に脳内（あるかどうか不明だがこうして考えることが出来るのだからあるのだろう）で【キラースタッグビートル（幼虫）はキラースタッグビートル（蛹）に変態しました】って聞こえてきた。  
誰が言つてるか知らないけど変態はないだろ？ 確かに昆虫が幼虫から成長していく段階は変態つて言うのかもしぬないけど、オツサンに変態は禁句だよ！ もう少しオブラーントに包んで欲しいよまつたく！

てゆーかキラースタッグビートルつておつさんのことだよね？ ま、長いからK S Bつて勝手に言つてつけど

そんなこんなK S B（蝶）のまま飲まず食わずに一週間過ごしました。正直これ以上はきつついと思つてたんだけど次の日起きたら【キラースタッグビートル（蛹）はホワイトキラースタッグビートルに変態した】という脳内アナウンスが流れた。  
だからもう少しオブラーントに（略）

まあ、無事に成虫となつたわけだが黒光りしてる父親とは違い、お

つさんは白いクワガタになつた。勘違いしてはいけないのが、おつさんが特別なわけじゃなくて蛹から孵つた他のクワガタ（兄弟達）も面白いんだよ。

時間が経つたら黒くなるところともなく、成虫になつたんだから出ていけとばかりに追い出されてしまった。

そして今に至るところわけ。

こうゆう時は解説役のがいてくれると助かるのだが、両親も兄弟も「キシヤーキシヤー」的な発音しか出来ないから何もわからないし、クワガタのボディーランゲージもイマイチ伝わらない。ところどころでおつさんは途方に暮れているのです。

兄弟は皆、何処かへと行つてしまつた。

おつさんは一人（匹？）寂しく森の中を歩き続ける。  
うん、予想外に疲れない。

運動不足やタバコの影響でこことこ体力ががた落ちしてたのが嘘のようだ。

つーかよく考えたらおつさんの背中には翅があるじゃないか。  
よし、ならば人類の夢である舞空術でもやってみようかな。

アーヴ、キャーン……フラーイー

…………あれ？ どうせつたら飛べるわけ？

## ねつねつ、食べる

結論から言おう。

おっさんは飛べました。

要領的には瞬きを高速でしながら歩いてる感じだ。

しかし、地面から二三十センチくらいをホバリングしてるだけであると言つておく。

それでも飛んだことに変わりはない、おっさんの的には大満足な結果です。

さて、飛行実験も終わったし次は何をしようか……

うん、決めた。

まずは飯だ飯。

おっさんと言つか、このクワガタの食糧は樹液というわけではなく（しかしどスウェイーツ感覚で食べることがある）肉だ。

おっさんがまだ幼虫だった頃は両親が採つてくれただが、今は自分で調達しなければならない。

この体になつておっさんは好き嫌いがなくなつた。

今では何食つてもうまいと感じる。

三十過ぎた頃から肉派から魚派に転職したはずなのにね。野菜はこの体になつてから食つたことはない。

だから本日は自生している野菜的なものとか果物的なのを探して食おう。

やつぱこの年になつてくると体が健康面を考慮しさじめるのか無性に野菜が欲しくなる時があるんよ。

つーか何より野性の獣狩るとかおっさんはレベル高すぎだ。ロッ

ブイヤーさんみたいな動物に角生える奴とか黒い毛並みの狼的な動物とか、ぐるぐる唸りながら一足歩行してた熊さんとかいるんだけど……おっさんには無理。

ヒューわけでここに生えてるキノコって食えんのかな？なんか黄色いけどおっさんの好きななめことかも黄色っぽいしイケるだろ。

お、そこそこうまい。

あれ？ か、身体がしび、れて……う……「」……け  
【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺回復力上昇のスキルを得た】

（数十分後）

【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺回復力上昇のスキルを得た】

いやー参った。

ありや、ダメだわ。

素人がキノコに手を出しちゃいかんね。

食べるキノコによく似た毒キノコもあるってことを失念してた。

毎年中毒に陥る人がそこそこのから気をつけなければな。

と、そういうしている内に林檎のような赤い果実を発見した。

おっさんの出身地の影響もあってか、ほとんど躊躇わずにぱくりとひと飲み。

【ホワイトキラースタッグビートルは毒状態になった】

あれ？ なんか目が霞むと言つか、苦しい……

お、おえ……  
きまさわるい……

（一時間後）

【ホワイトキラースタッグビートルは毒回復力上昇のスキルを得た】  
ふう、あーきつかつた。おっさんがこんなに体調悪くしたのって高校の時に友人からインフルもらって寝込んだ時以来だよ。

それよりも食える物を探さねばな。

こうなつたら野草を食うか。

お、これ山菜じゃね？

おっさん田舎育ちだから山菜はわかんのよ。おっさんの祖母がよく採ってきてたからな。

あれ……なんだか眠く……

【キラースタッグビートルは睡眠状態になった】

（数時間後）

【キラースタッグビートルは睡眠回復力上昇のスキルを得た】

いやー、なんか知らんけどよく寝た。

でもなぜだろ？……

眠ったのに疲労感やその他が解消されてない。  
ま、いつか。食える野草なわけだし。

もう一つ……ぐう……

## 【ホワイトキラースタッグビートルは睡眠耐性のスキルを得た】

ん？ 痛つ！？ なんか痛つ！？

チクチクとした痛みに意識が覚醒する。

何事かと思って周りを見渡して見れば、おっさんをロップイヤーが角で突き倒していた。

なんつーか地味に痛い。

爪楊枝で肌を刺さるほどの力ではないけど、なんやられてる感じ？  
まあ、弱肉強食って奴かね？

そりゃ無防備に寝こけてる奴がいたら好機とばかりに襲いますよ。  
とゆーわけでおっさんは逃げます。

戦わないのかつて？

いや、おっさんに実害はないわけだし、何より鬼を殺すのがめんど  
い。

ホバリングしたおっさんのスピード舐めんなよってことでその場から離脱したわけだが、腹減った。

あれだね。結局あんまり食べてないもん。

じゃあ何を食うかって言つと木の根っこだ。おっさん今、虫なわけ  
だし木の根っこも食えるでしょ。

とゆーわけで早速地面を掘る。

ほどなくして根っこを発見＆ゲット。

いただきまーす！

【ホワイトキラースタッグビートルは混乱状態になつた】

あれ？ なんでおっさんはこんなところで根っこなんか食べてんの?  
あ、やべ……炬燵の電源切つたかな?  
いやいやそれを言つならガスの元栓の閉め忘れも……  
あーおつぱいで癒されてー……

【ホワイトキラースタッグビートルは混乱回復力上昇のスキルを得た】

はつ！？

おっさんは今何を……

とゆーかなぜだかソープに行きたくなつた。

その後、おっさんは生き物を狩ることなく自生してゐる植物などを食つて生き抜いた。  
最初はなんか変な状態になるけど何回も食べると平氣になつてくれるのよ。

そんなこんなおっさんがクワガタになつて三ヶ月が過ぎた。

【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺完全耐性のスキルを得た】  
【ホワイトキラースタッグビートルは毒完全耐性のスキルを得た】

【ホワイトキラースタッグビートルは睡眠完全耐性のスキルを得た】  
【ホワイトキラースタッグビートルは混乱完全耐性のスキルを得た】

【不殺・特定の状態異常耐性・行動範囲が森のみで三ヶ月生きるの特殊条件を満たした。ホワイトキラースタッグビートルはエメラルドスタッグビートルへと変態した】

【エメラルドスタッグビートルになつたことで森の加護を得た。以降森での行動に補正が付きます】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで木々の声のスキルを得た】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで植物成長促進のスキルを得た】

朝起きたらおっさんはキラッキラッの濃い緑色になつてました。

## おつさん、初めて会話をする

いやー驚いた。

起きたら縁のおじさん（クワガタ）になつてたとか何の[冗談よ。つーかまた変態言われた。

おつさんはダンディなロマンスグレーなのに……

いや、今は縁だからロマンスグレージやねーや。ロマンスグリーン? とゆーか縁になつて何か変わったわけ?

あ、保護色か。

森の中でうんたらかんたら言つてたのはそいつのことへ。それよりもまた適当に食い物探ししますかね。

お、赤い果実はつけーん!

『それ、毒あるわよ』

「いや、おつさんには効きませんから」

毒完全耐性とかゆーの持つてるからね。

この二ヶ月の間に色んな毒性植物を食つた結果だよ。

今では一口食べれば「あ、毒ある」ってわかるんだよね。

その他の耐性のおかげでおつさん何食つても大丈夫。

『そうなんだ』

「そうなんです」

『じゃあ、もつと毒が強力な実を作つた方がいいのかな?』

「いや、あらゆる毒植物を食つた毒マイスターなおつさんの意見を言わせてもらえば、この実はそこそこなレベルの毒を持ちながらも毒っぽい臭いがしないんだよね。その点は摂取する側としては嵌められた感がある」

『せつか。ならいのままでも生き物を毒殺するのは訳無いのね  
「そりそり。ま、おつさん以外はね……って誰っ？」

おつさんと今まで会話したのは誰ですか?  
しかし、周りを見回してもそこには誰もいない。

### 『クスクス』

なんかおつさんを笑ってるみたいな音が聞こえるがそこにはやはつ  
誰もいない。

「……幻聴？」

寂しいおつさんの心が作り出した。エアなボイスだったのか。  
おつさんは幻聴よりもきわどい水着のおねえちゃんの幻影が見  
える方が良かつた。

ここで全裸のおねえちゃんじやないのは、逆に上口さが消え失せて  
しまうからだ。

森で水着はエロいが森で全裸ではエロさが足りない。  
これが分からん奴は性欲に真つすぐな青い小僧だ。

そして「その水着つて葉っぱ製ですか?」と考えた奴は誇つてい  
や。お前は立派な戦士だ。履歴書の職歴に戦士と書きなさい。

おつさん?

おつさんはただのオッサンです。それ以上でもそれ以下でもありま  
せん。

『幻聴じゃないよ。ヒューか聞こえてたことに私がビックリ』

また声が聞こえる。

「こだ……どこにいるんだ。」

声が優しげなおねーちゃんっぽいからきっと美人に違いない。

「頼むからおっさんに姿を見せなさい」

『いじりちよ』

声のした方向に田を向ければそこには先ほど食べた果実のなる木しかない。

『そう、あなたが今見るのが私』

「所詮は幻聴か……」

『いやいやいや！　私だってば！　その見つめてくれてる木が私』

木が私って……

幻聴さんはとんだファンタジー思考によつて作られたものみたいだ  
な。

やれやれ仕方ない……

「これが？　これがええのんか？」

おっちゃんはとりあえず木を舐め回した。

さて、脳内の妖精さんよ。どう反応するんだい？

『や、やめて……まだ樹液は外に出てないの。私、まだ傷がついた  
経験がないから……』

なんかやたら艶っぽい感じで返してきたな。ここは良いではないか  
とか言いながら続けるべきか……

一度整理してみよう。

脳内でエアな相手を作り、それを木に見立てて会話し、その木を舐めるおっさん……

うん、気持ち悪いね。

絶対に友達になれないし、友達もいない（変態仲間はいるかも）

「おっさんは馬鹿だつ！」

『え、そんなことないよ。気持ち良かつたし』  
「植物を満足させて何が楽しいんだつー」

『なんか……』めんね？

「いや、君は悪くない。悪いのは全部おっさんだ」

『元気を出して』

「慰めるなよ馬鹿野郎。優しくされるとおっさん付け上がりやうからね」

『あのーちょっとといいつすか？』

『あ、はい。何ですか？』

『ひとつと光合成に集中してるんで、もう少し静かにしてもらつていいくつか？』

『い、ごめんなさい』

『いやいや、君はまだ若いから仕方ないつすよ。おーい、誰が一番酸素作れるかの競争再開しようつす』

『うーー』

『おけ』

『任せんしゃい』

『なんか脳内音声が増えた……』

しかも酸素を作る競争とかしてるし。

正直ありがどづ。あなたたちのおかげでおっさんなりは生きていけます。

そして「」めんなさい。おっさんは「酸化炭素を吐き出すためのダメ生物です。

『なんかますますへんでるね。大丈夫、ちょっと注意されただけで杉690452さんも怒つてないから』

なんかまた慰められた。

とゆーかおっさんに対して「お母さんもう怒つてないから大丈夫だよ」って近所のお姉さんが言う感じなのはいかがなものか。ま、そういうの大好物ですけど。

「さすが脳内音声。おっさんの好みを熟知してやがる」

『さつきから脳内音声って言つてるけど違うよ~。』

「はいはい。わかってるわかってる」

嘘ついた子供に「お前嘘ついたろ?」って言つても「嘘なんかついてないよ」って返してくれるようなもんだな。

おっさんの脳内は生まれ変わったせいか思考が若々しいらしい。

『いや、私と会話できるってことはあなたそつゆうスキル手に入れたでしょ? 心当たりある?』

む? 何やら必死だな。

「はいはい。例えば何があるのかな?」

『えっと、木々の声ってゆーのが代表的なものだけど……』

木々の声ね。うん、確かにそんな感じの起きたら手に入れてたかもね

……つて

「え、うわ、やだ、まじ?」

『あ、やっぱり?』

「こいつおでれーた。

木の間にことが本当にまじでねつて木と会話してたわけ?  
なら、あの変態行為も……

「色々まんかった。許してちょんまげ」

『……うん、許すよ。あと、くわしく』

なにかともあれおっしゃるは初めて誰かと会話が出来ました。

## おっさん、大樹と話す

おっさんは今、森の奥へと向かっている。

厳密には奥とかそういうのはおっさんにはわかんないけどクドゴリ  
ン247526（毒の果実の木）が言つにはおっさんが向かう方角  
は森の奥らしい。

そしておっさんがなぜ森の奥に行くかと言つと、森の奥には森の木  
々の中でも長老的な存在がいるらしいからだ。

なんか「樹齢一萬年を軽く越えるから物知りだよ」とのことで、年  
功序列なおっさん的にも話を聞くのは悪くないと思つたからだ。  
道中で道に迷いそうだったらそこいらにある木に聞けばいい。とゆー  
か木達はおっさんに結構フレンドリーだ。

曰く、「木仲間以外で話をするなんて滅多にない」とのこと。  
全くないと言う奴は全体の三割ほどらしく、時たまおっさんみたい  
な木々の声のスキルを持つ者と会話したことある奴もいるわけだが。  
そいつらの話を聞くと、どうやら人間やエルフという耳が長い人間、  
獣人という獸臭い人間がいるらしい。いや、エルフとか獣人は人間  
に数えんのか？と突っ込んだが、どうやら木達にとっては一足歩  
行、ある程度の知性の二つがあれば人間としてカテゴライズしてる  
らしい。おっさんがわかりやすく解説すると乳牛も肉牛ももれなく  
牛ということだ。えつ？ 違う？

それにもこの木々の声というスキルは便利だ。

どこに他の生き物がいるのか教えてもらえるし、何よりどの草が食  
えるとか自分の実は美味しいとかを知ってくれるのが何よりありが  
たい。

これで食料を確保するのは楽といつものだ。

そんなこんな進んでいくと開けた場所に出た。

そこには陽光を反射し、キラキラと輝く湖があり、その湖の中央にある小高い丘に大樹が聳えていた。

「綺麗だな……」

どこか神聖な空気が漂つその光景に無意識に言葉が漏れる。

おそらく長老的な木というのはあの丘の大樹に間違いないだろ。おっさんは翅を広げてその大樹の元へと向かった。

エメラルドスタッグビートルに変態（相変わらずこの表現は不服だ）して一メートルほどの高さまで飛べるようになつたのは果たして喜ぶべきことなのだろうか。

「じんにちは

大樹の元に降り立つたおっさんは第一印象が大事とばかりに挨拶をする。

いや、まじで第一印象は大事よ？

対人関係なんて第一印象で物事が進むからね。ただし、第一印象が悪いとそこから挽回するのは大変だけど、第一印象が良いとこれから悪くなる場合は前者よりもかなり早いことも付け加えておく。

『ほむ、じんにちは

おっさんの挨拶に大樹が返す。

『話は根っこワークで聞いとるよ。して、何をわざに聞きたいのかね？』

ちょっと待ちなさい。

根っこワークって何やねん。ここはツッコむべきか？いやいや、初対面の相手、しかもかなりの年上にいきなりツッコむとかどうなのよ。

でも、上司が「今の若者はわからなくて人に聞くところがなに」ってちょいギレで愚痴つたりすることから考えれば、ツッコミはしなくともわからないなら聞くべきか。

そもそも大樹も聞きたいことがあるなら聞けよ的なスタンスみたいだしな。

「まず、第一に根っこワークってネーミングは誰が付けたんですか？」

知りたいのはこれだ。

根っこワークの説明？ んなもんネットワークにかかつたもんだろ。それを根っこで行つから根っこワークだ。予想でしかないけど多分合つてゐるはず。

『ほむ、難しいことを聞くのう。根っこワークは根っこワーク。昔からそう呼んじた。特に意味はない』

「簡潔な説明ありがとうございました。お蔭様でよくわかりました

上

大樹に対して礼を言う。なんか嫌味に聞こえるかもしけないな。でも納得はしてるんだよ？ 意味のない名称なんてあるところにはあるわけだし。これもその一つなのだろう。  
さて、次の質問に行こうか。

「それで次に聞きたいことなんですが、ここって何処なんですか？」

ある意味これが一番聞きたいことだ。

他の木々に聞いても同じことが返ってくるだけなのだが、もしかしたらこの大樹なら

『ほむ、なんじゃ、自分が暮らしてる場所もわからんのか？　ここはミズドリウムの森じゃ』

しかしこの大樹もまた他の木々と同じ言葉を返す。

確かに、『ここ』という場所を表す言葉ではあるがおっさんか聞きたいのはそうゆうひとじゃないんだよね。

「聞きたいのは森の名称じゃなくて、『ここ』が何処の国に属しているとかなんですけど、ご存知ありませんか？」

当然、この質問も他の木々で試している。しかし、返ってくるのは「わからない」ばかりだった。

『ほむ、確かプリオーレ国じゃったかの……五千年くらい前の話じやが』

知っていた。

大樹は自分が生えてる国を知っていた。ただし、五千年前ではあるが。

五千年つたら縄文時代とか弥生時代とかまで遡るよな？　もしかして類人猿？　おっさん、歴史は苦手だからわかんない。でもそんくらい昔の話。

さて、プリオーレとか言ひやたら可憐らしい国におっさんは心当たりがない。しかし、もしかしたら過去にあった可能性も否定できない。だが、見たこともない生き物やエルフや獣人ってことから、ここは

ファンタジー世界だという可能性がおっさんの中では一番大きい。まずはこの辺を確かめるか。

「地球とか日本、アメリカ、中華人民共和国、アフリカ、ソビエト連邦、オーストラリア、コナイティッドキングダム・オブ・グレートブリテン・アンド・ノーザン・アイルランド。この中で一つでも聞いたことのあるものはありますか？」

『ほむ……残念ながらわしの記憶にはないのう』

「根っこワーク使つてもですか？」

『ほむ、ちょっと待つおれ……なんじやつたかのう？』

もう一度、今度は一つ一つ聞いてみる。

十分ほどの沈黙が流れ、おっさんの目が空の雲の動きを追っていると不意に大樹に声をかけられた。

『ほむ、残念ながらわしの根っこワーク圏内にはわかるものはおらんようじゅ』

ほむ、誰も知らないか。あつ、移つた……おっさん、ドントマインド。

まあ、大樹には悪いがあまり期待してなかつたけどね。

これでおっさんのファンタジー世界じゃね？ って想いがちょっと大きくなつた。ちなみにおっさんの中では最初からファンタジー世界でほぼ確定している。

だけどどつかの誰かが言つていた何事にも絶対はないの言葉を尊重してそうちつたらいいなどばかりに地球のどこかだという余地を僅かに残しているに過ぎない。

「わざわざすいませんでした。そういうえばなんですけど、おっさん……私は元々人間だったんですけど、ある日大きな黒いクワガタ……」

ブラックキラースタッグビートルでしょうか……に殺されて気付いたらその幼生体になつてたんですけど、その現象に関して何かわかりませんか?』

わざわざ黒とかブラックつてクワガタの前に付けるおっさんはいじらしい存在ではなかろうか。

『ほむ、それは興味深い。この森の主的存在であるブラックキラースタッグビートルに殺された人間というのはわしもいくつか心当たりがある』

『ほう、詳しく述べたいものだ。』

そして主的存在といふことはつまりブラックキラースタッグビートルはおっさん(クワガタ)の父親しかいないらしい。さて、本邦初公開。おっさんの母親の色は灰色である。實際森の中でたまに見かけた両親以外のキラースタッグビートルには實に灰色が多い。

『ただ、森に入つて運悪く奴に出会つたがために殺された人という存在はそこそこのでな。特定は出来ん』

『あ、えつと見た目は四十手前くらいのオッサンなんですけど……』

『すまぬが特徴を言われてもわしらにはようわからん。それがエルフや獣人、人間などの種族じゃつたらわかるんじゃが個人の特徴は雄か雌かくらいしか……の』

『いえ……』

まあ、それは仕方ないことかもな。

何せおっさんだって木を見て個別に判別するのは無理だ。

それが桜か銀杏かはわかつても桜の木の内のあるこれは傷があるなどの特徴がないと厳しいものがある。そもそも意識して見なければ

それはただの桜としてしか見ない。

……ん? よく考えたらおっさんはやたら田立つはずの特徴があつたじやないか。

「あ、あのー、ある日突然森の中に現れた人間。そういう人物に心当たりは?」

おっさんは氣付いたら森の中にいた。

それならば不自然な人物として田立つたはずだ。きっと注目を集めたはず。

『根っこワークで聞いてみよ!……ほむ、確かにいたみたいじゃな』  
「マジですか!?」

いかん。興奮して敬語じゃなくなってしまった。落ちつけ落ちつけー。

「本当ですか?」

『ほむ、だいたい六百田へりて前にそのような人物がいたそうじゃ』  
「うつ……」

予想以上に前だったために驚きに言葉が詰まってしまう。

『ほむ、すまなんだが目撃したものもよく覚えておらんらしい。何せ紅葉の前じやつたみたいだし、いきなり現れたと思つたらふらーつと歩き出して殺されてしまつたりじくてのう』

「そうですか……」

夢だと思つて歩き回つた結果、でかいクワガタに出会い死んだわ

けか。

他人（他木?）から見たということを聞いて考えてみるとなんとも  
マヌケなことだ。

まあいい。切り替えよう。

なぜならおつさんは最近加齢臭がきつくなってきた身体から入浴剤  
の森の香り（エメラルドスタッグビートルになってからふと嗅いで  
みました）みたいな匂いのクワガタになつたのだから  
第一の人生、この身体で楽しんで生きていくうじやないか。

## ねつねつ、大樹と話す（後書き）

ヒロインを出せる気配がない……

あと数話は出できません。ヒョーーかクワガタと木だけだと一々三話やる予定です。

ヒジだけ聞くと昆虫の観察日記みたいですね。

プロットやりしたもので流れはラストまで大体決まつていて、あとは思いつくままに肉付けって感じで書いてます。

早くヒロイン登場まで書いちやいたいけどペースが上がらない……

ああ……早くオッサンに真っ当なセクハラをせてぇよ……

愚痴つてすいません。

読んでくれてありがとうござります。

出来ればこれからも拙作にお付き合っていただければ嬉しいです。

## 続おつさん、大樹と話す

『さて、わしからおぬしに尋ねたいことがある』

唐突といつわけでもないが、大樹がなにやら物々しげに声をかけてくる。

「いつもつて物語だと得てして厄介事に巻き込まれたりするんだよな。おつさんそつゆつのノーサンキューなわけよ。

「黙秘権を使用します」

「どうだ！ もつぱりと断つてやつたぜ。

おつさんはノーと言える日本人。上司が帰りに呑みに行こうと言つても奢り以外では行きません。奢りなら限りなく百パーくらいで参加するけどね。

ちなみにおつさんは25歳以上の女性（発育は平均以上）でないと興味がないので「新入社員の若い女の子達も来るんだよ」と言つ誘い文句に踊らされない。ただし、「中川さん（36歳・既婚）も来るみたい」にはほとほと弱い。中川さん、美人で胸がでかいからね。おつさんの好みどストライクなのさ。人妻？ おつさん的にはその響きは世界一のバイオリニストの演奏並におつさんの心を奮わせます。

ただ、肩にポンと手を触れただけで「セクハラですよ」と言われるのはいかがなものか……

その癖、他の社員の男（美形）に同じことされても「なに、偉そうにしてんのよ」とがまんざらでもない顔で言つんだよね。

不快感を感じたらそれすなわちセクハラ。日本政府よ……ちゃんと境界線を決めてくれ。あつ、今居るのはたぶん日本じゃねーからおつさんには関係ねーか。

『して、何を尋ねたいかと言つとじやな』

ん？あれ？おっさん黙秘権使つたよね？  
なんで話が進んでんの？

『人という種についてじや』

「はあ」

言つちやつたよ……

こつちが黙秘権使つてゐるのに聞いてきやがつたよ。  
これ、もう聞くしかなくない？

「どうゆう事ですか？」

『ほむ、人という種になりたくはないかといつことじや』

よくわからん。

でも、なりたいかと聞かれればなりたいわけだが……

「なれるんですか？」

『可能性の話じやが……わしが見たところ、おぬしには人という種  
になれる可能性が高い』

「どちら辺ですかね？」

『その前に人という種がどうやって誕生したか知つとるかの？』

人がどうやって誕生したか。

これは歴史が苦手なおっさんでもわかる。

猿から類人猿。そして類人猿から人へと進化していくことで人が誕  
生したはずだ。いわゆる進化論だな。

まあ、アメリカなんかじや神様が全て造つたと言う創造論を信じて

る奴がかなりいるらしいが、おっさんは断然進化論を信じてる。

「えーと、神様が造った。または別の生き物から進化した。この二つが考えられますが、私は後者だと思います」

『そう、それが正解じゃ』

正解って言われた。クイズだったの？

『人という種は進化によって元よりも優れた力を得た。まずははじめに妖精の中から進化した最初の人という種が現れ、自らをエルフと名乗った。次いでエルフが作り出した無機物に命を吹き込んだ物、つまりはゴーレムから人に進化した者が現れ、ドワーフと名乗った。次に四足の獣の中から進化した者が生まれ獣人と名乗り、その次は水の中で生きる者から進化した者は魚人と、最後に二足で歩行する猿は人間と名乗ったのじや』

「そうですか」

だからなんだよって話。

ついか人間はやっぱ猿から進化したのな。獣から進化した点では獣人とやらと同じだが、きっと獣耳がないのだろう。あとは、見たことないからわからんね。

『その進化した条件はなんじゃと思う?』

「さあ? わかりません」

『少しは考えて欲しいんじゃがな。まあ、よい。人に進化したものにはある共通点があつたのじや。それは……知恵と魔力。そしてその魔力を扱う技術じや』

「なるほど」

わかつたよくなわからぬような……

で、それがなんでおっさんが人になりたいかどうかの話に繋がる？

『わしはおぬしを見て、言葉を交わした。その結果、おぬしは人と同じような知恵を持つていてわかった。いや、おぬしの言葉を信じるならば人であつた存在がスタッグビートル種へと知恵をそのままに生まれたことになる』

「……要約すると？」

『わしは長年生きてきた。そのうえで、初めて人へと進化できる可能性を持つ虫を見つけたのじゃ。じゃからおぬしが人に進化したいと言つのならば、手を貸そうと思つての』

「なんでそんな一文の特にもならないことを？」

ぶつちやけ裏があるだろと勘繆つてしまつ。

おっさん、これでもドロドロした大人の世界にいたからね。これまで親切にされることに抵抗感があります。

『ほむ……いいじやうづ、話してやうづ。まず、最初にエルフに進化した者はタファンの森という場所に現れた。ドワーフもタファンの森が最初じや。次に獣人はバコタの森で生まれたのじゃ。魚人はどつかの海。人間はテロンの森の猿が進化した種なのじゃ』

どこので進化したとかどづでもよくな?

『で、根づくワークで一年に一度超長距離根づくワーク会議があつての』

もはや根づくワークはどづでもこいんですけど

『あいつら何年経つてもそのことを自慢げに話して悔しいんじやー』

……は？

『じゃからおぬしを進化させて、新たな人の種に立ち候つ』とて自慢したいんじや。じゃから、な？一緒に頑張り？』

『いっ、他の木に自慢してーだけかよ。

『やつてやつてもいいけど、世の中はギブアンドテイク。おっさんが進化することであんたは他の木に自慢出来る。だけどおっさんはあんたは何をくれるわけ？』

おっさんの中で大樹のランクが下がつたことで発言がかなりおざなりになつた。

ちなみに人に進化出来るならそれだけでおっさんには利益がある。しかし、相手にお前が言つから仕方なく進化してやるんだぜつてスタンスになることによつて恩着せがましく、もつと色々な物を引き出さうと狡い活動中です。

『ほむ、それは進化できてから決めようではないか』

……腐つても（物理的には腐つてないけど）一萬年以上を生きる大樹か。

ここで了承すれば、進化出来たとしても「ほむ、進化できたんならそれで十分じゃないかのう」とか言い出す畏れがある。なんとしても言質はとつとかねーと。

『なんか役立つもんくれ』

『とは言つても、所詮わし木じやし』

『一万年生きてるならなんかあるだろ』

『ほむ……そりじゃな。ならばわしの力を『えよつ』

「『える？ どうやつて？』

『わしの力を濃縮して実を付けるんじゃよ』

おっさんには大樹が不敵に笑ったような気がした。

## 続おっさん、大樹と話す（後書き）

まず初めに、この物語はファンタジーです。猿から人に進化するには何十年、何千年、何万年かかったとか言うツッコミは聞きますん。

なぜならファンタジーだからです！

大切なので一度言いました。

納得できない部分はこれでどうにか誤魔化してください。

なお、ファンタジーでも説明出来ないような疑問があれば質問はあります。答えるかどうかは別ですが……

ただ、出来る限りは答えたいとは思います。

作中に出できた中川さんですが、私の書き方のせいで感じ悪い人には見えるかもしれないんですけど、実は悪いのは全部オッサンだつたりします。一人称なのでそこらは書けませんが、悪いのはオッサン。これだけはわかつて欲しい。

ちなみに裏設定では中川さんはオッサンと同期入社。  
機会があればそこらも書こうかな……

## おっさん、修業する

その後、大樹によつてプロトコースされたおっさん進化計画が実行に移された。

人になるために必要な物は、知恵・魔力・魔力を扱う技術の三つ。その内、おっさんは知恵の面はクリアーしている。

しかし、魔力に関してはさっぱりなのでそこを一から習得していくことになった。

以下はおっさんの魔力を感じられるようになるための修業のメモリアルです。

『まずは体の内に眠る魔力の波動を感じるんじや』

「……具体的な説明を求めます」

『カーッとやって、グーッとする感じじや』

「カー……？ グー……？ 擬音つて本人以外にあんまり伝わんねーよ。おっさん感覚派じやなくてわりと論理派なところあるし」

『ほむ、そうじやのう……己の中にあるドロドロしたものを吐き出すかんじかの？』

「わかった。部長のハゲーッ！ ジラの癖に偉そうにしてんじやねーよ！」

『言葉の意味はよくわからんが多分違うぞ？』

「あなたの言つた通りにやつたんだけど？」

『違う。魔力はもつと熱いもんじや。いつ……人で言つ情熱的なパトスつて奴なんじや！』

『それならおっさん得意だわ。すう……イメクラで赤ちゃんプレイとか女教師プレイがしてーー！』

『それも違う』

などといつ、客観的に見ればなにやつてんの」にひり的な押し問答を三日ほど繰り広げた結果、

おっさんは

魔力を

感じられなかつた。

つーか当然だよ。

おっさん今まで魔力とか言つのと無縁だつたし、なにより教師役の大樹がクソの役にも立たない無能だ。

おっさんは悪くありません。

『ほむ、おぬし才能ないのう』

ぐおっ、面と向かつて言われるとは……

はいはい、正直「魔力を感じるくらいなら一日で出来るよ」になるじやる」とか言われていい気になつてましたよ。

薄々、おっさんには才能ないなつて思つてました。  
しかし、あれだな。へこむわ。俯くほどじやねーけど、暗い気持ちにさせられる。

『落ち込むでない。内的魔力はダメじゃつたが、まだ外的魔力があるわい』

大樹の言葉によつておつさんの暗かつた視界に一筋の光が差し込む  
よつな幻が見えた。

「その話を詳しく述べ

『今までの修業は「」のうちにある魔力、つまりは内的魔力を感じる  
ためのものじやつた。しかし、他者から放出される外的魔力を吸収  
し、「」の物とする。利点は魔力の波動がわかりやすく、扱いやすい  
事じや』

だつたらなんでもつと早く教えてくれないのかと思うが、教えなか  
つた理由つてのもあるのだらう。

利点があるつてことは欠点もあるだらう。

「よし、教えてくれ

だがおつさんに迷いはない。

なぜなら早く人になりたいからだ。

いやー、声に出してからイメクラ行きたくてたまんねーのよ。もつ  
おつさんの体内時間で四ヶ月は行つてねーもん。

でも、クワガタとお医者さんごっこがしたい女性がいるだらうか？

クワガタなおつさんを鞭でシバき倒しながら罵倒してくれる女王  
様がいらっしゃるだらうか？

もしかしたら世界のどこかにいるのかもしれない。だけど探すのは  
めんどくさい。

だからおつさんは人にならなければならぬ。

『ほむ、覚悟を決めた良い田じや。しかし、難しいぞい？』

「望むところだ」

あつと大樹には今のおつさんの姿がイケメンに見えてるに違いない。

気持ち真面目な顔してつし。

『外的魔力を扱う上で、まずは魔力の色について説明しようかの』  
そう言つて大樹が説明してくれたことをおっさんなりにまとめてみると

魔力には五色の色がある。

それは赤・青・黄・緑・無色の五つ。

赤は火を司り

青は水を司り

黄は地を司り

緑は風を司る

無色はそのいづれにも属さないものであるが、何物にも染まつてい  
ないために応用性の高い代物である。しかし、その力は他の四色に  
比べれば圧倒的に小さい。

あとは赤は青に弱く、青は黄に弱く、黄は緑に弱く、緑は赤に弱い  
というジャンケン的な相性もあると教えられたが、そいつは今あま  
り関係ない話しながらどうでもいい。

外的魔力を扱う上で最も大事なのが無色の魔力だ。

これは太陽から降り注いでいるらしい。ちなみに月からも魔力が降  
り注いでいて、こちらはかなり純度が高いそうだが太陽と比べると  
千分の一くらいの量らしい。  
つまり、おっさんが外的魔力を扱うためには

『イメージじや。』の葉緑体に光を取り込むかのように魔力を取り込むイメージじや』

無茶を言いなさる。

おっさんはひなたぼっこはしても光合成はしたことありません。

『いへ……太陽よ、わしに力を分けてくれなスタンスで挑むのじや』  
どこの野菜人だよ。

いや、あればダジャレ好きの人『元祖の技だつたつけ?

「太陽よ、おっさんに力を分けてくれ」

とりあえずやつてみた。

物は試しつて昔の人も言つてたしね。

……しかし何も起こらない。

「つおおお！ 猛ろ！ おっさんの葉緑体！」

当然、何も起こらない。

「太陽様、なにとぞこの矮小なるおっさんに力を分け与えてください」

下手に出てみた。

だが、何も起こらない。

「いいぜ。いつまでも付き合つてやる」

「いや、長期戦だなとおっさんは覚悟を決めました。

あれから半年ほどの時間が経つた。

その間のおっさんの視線はほとんど空にあった。

晴れの日は太陽を睨み、曇りの日は邪魔だとばかりに雲を睨みつけ、雨の日は天然のシャワーを楽しんだ。

いや、全然冷たく感じねーの。しかもおっさん、洗車して撥水コートしたての車の「ごとく水と汚れを弾きまくり。湖に浸かるのもいいけど、シャワーは痛快だ。毛穴までしつかりクル。大粒の雨の打撃が心地いいです。

#### 閑話休題

この半年間、何度となく外的魔力の吸収を諦めようかと嘆いた。

その度に明日とともに現れる太陽さんが「小僧、貴様はやはりそれっぽっちの存在か」とやたら渋い声で話しかけてくる（完全なる幻聴、妄想の類）

そんなとこがおっさんの負けん気をくすぐる。

いつしかおっさんは日の出から太陽さんを出迎え、お願ひしますの声と共に日の光を浴びながら魔力を吸収するイメージを持ち続け、日の入りでありがとうございますと言いながら太陽さんを送り出すよになつた。

まあ、結局何が言いたいのかというと努力は人を裏切らないってこと

とだね。

【ヒメラルドスタッグビートルは無色の魔力吸収のスキルを得た】

これだよ。あるローラーと久しぶりのこの声だよ。  
もつおっさんしばらくは太陽見なくていいや。

何がお願いしますだよ。そして何がありがとうござりますだよ。所詮、おっさんと太陽の関係は勝手に魔力を排出してる側とそれを有効利用させてもらってる側ってだけでしかない。

太陽が地上の一生物でしかないおっさんをピンポイントで見てるわけもねーわけだし。

なにより、おっさんはオッサンであつてまだジイさんじゃないわけよ。早寝早起きは柄じゃねーわ。  
んじや、寝よつと。

『よし、弟子よ。修業を次の段階に進めるぞい』

最近、すっかり師匠気取りな大樹が話しかけてくる。  
スキルを得たことでテンション上がつて報告したのは失敗だった。

「いや、おっさんは寝る」

そもそもと巣に入る。

築一千年強の木造。たまに話しかけてくるけど住み心地は悪くない。  
そんな物件。

「大樹。休息のために十日ばかり時間をくれ」

そんなことを言いながらおっさんは意識を睡眠モードへと移した。

おじいさんの母に聞いた『ニキ、畠山から渡る船のねらい』とこの歌は  
寝てて聞けなかつたといひますと云ふ……

## おひしゃべり修業する（後書き）

要約するとオッサンが変なこと考へながら半年間ひなたぼっこに熱中した話でした。

次話で進化かな……

ある意味オッサンの進化までが序章です。

## おっさん、進化の条件満たす

修業したがりの大樹をばぐらかし続けて三日。

大樹がうるさいために予定より短い期間となつたが、銳氣を養うことは出来たため、おっさんはいよいよ魔力を扱う技術を修業する。

と、その前におっさんも半年間ずっと空ばかり眺めていたわけじゃない。日の入りから日の出までは約十一時間くらいあるので、その間に大樹に色々聞いたのだ。

その中から一つ説明せねばならないものがある。

一つはスキルというものについてだ。

とは言つても詳しいことはよくわからないうらしい。

だがしかし、スキルを得るには修練や経験がものをいうらしいとうことはわかっている。そしてスキルを得た瞬間にいつでもそれに即した行動をとることが出来る。

例えば、必死で剣を振りつづければ剣術基礎スキルを得る。これは修練により得たスキルであり、今まで野菜くらいしか切れなかつたのに直径十センチくらいの木なら断ち切ることが出来るようになるらしい。更に色々な修練をつめば剣術スキルになり、剣豪スキルに変わり、剣鬼、剣聖と変化していくみたいだ。また、その過程で剣技という必殺技を得ることもあるのだが、これもスキルとしてカウントされる。

あとはおっさんが持つてる毒とかの完全耐性。こいつは修練の面がないとは言えないが、基本的には経験から会得するスキルだ。やら毒を食つた結果、体の中で「これ毒あるじゃん。分解しようぜ」つてな具合にやってくれてるみたいだ。

習得するスキルの種類は常時発動型と意識発動型、そして種族特有型の三つがある。

内容は読んで字の「ごとく」であり、前者の一つは誰であっても会得出来ると言われている。最後の種族特有型はその種族なら最初から持つてゐるが、他の種族の者が会得するのは難しいみたいだ。

ちなみにおっさんの木々の声のスキルは多分種族特有型であり、他の種族は大樹曰く森にずっと住み着き、植物に話しかけ続け、人格的に優れた者が会得することがあるらしい。このスキルはエルフとか獣人の中に一世代に必ず一人は会得する奴が出るみたいだ。

さて、簡潔ではあるがこれがスキルの説明だ。なにかあれば後ほど詳しく述べる部分もあるかもしれない。

次にスキルを得た時に聞こえてくる【】の声について軽くだが説明しよう。

とは言つても難しく考えるようなものではなく、世界を見守つてゐる神様の声だという説が一般的（木達の中で）だ。人ならば違う見解を示していたりするのかもしれないが、おっさんもこれでいいと思つ。

とゆーかこれ以外になにがあるの？ つて感じ。おっさんの妄想つて言わればそれまでだけど、大樹も昔は聞こえたつて言つてるからおっさんの妄想説は否定させていただく。

ファンタジーなら神様が実在してるとかは十分有り得る話だ。  
以後、この声のことを天の声と呼称することにしよう。

では、魔力を扱う修業編に行こう。

「ふうう～、こおおお～、ぬううん～」

湖に浸かりながら唸るように腹の底から発声する。気分的には氣功の達人みたいに氣を練つていくような感じだ。

あくまでも気分だけの問題であつて大した意味はない。

さて、なぜおっさんが湖に浸かりながらこんなことをしているのかと言つと、魔力を扱う技術として広く知られているものの内の肉体活性を会得するための修業の一貫だからである。

肉体活性。つまりは魔力を使つてのドーピングだ。これが出来れば肉体の限界の枠を越えた動きも可能となる。ただ、見た目や実感的なものがわかりにくいために湖に浸からせてもらつてる。

とゆうのも目には見えない魔力の波動というものであつても、流体である水には波という形で影響を与えるからだ。視覚的にはわかりやすい。

そして今現在どうなつてているのかと言つと、おっさんを中心として波が立つていてるわけだ。

……おっさんが動くのにあわせてだけね。

水に指を突つ込んだら波打つ。これは当然のことである。

ただし、魔力の波動で波打てばもっとすごい感じになるらしい。つまりはおっさんはまだ魔力を使っての肉体活性に成功していないわけだ。

「はあああ……ダメだ、出来る気がしない

『まだ一日目じや。諦めるには早いぞい』

「なんかコツとかないわけ?」

『コツと言つても、体内に吸収した魔力を体中に行き渡らせるだけの話じや』

それが簡単に出来たらコツとか聞きました。  
つーか無理。どだいおっさんには無謀な挑戦だ。

『まずははじめに吸収した魔力が今どこにあるかはわかるじやない?』

もう諦めてバツクレようかと思つていると大樹が今更なことを聞いてくる。

吸収した魔力の存在はなんとなく感じられる。なんか飴玉を丸呑みしたみたいな変な感じが体内の一部分にあるからだ。

「わかるよ」

『それを体中に送つてやればよい』

「だから、それがわからんのよ。ビツヤツてやればいいわけ?」

『バシュウヒヤツヒギューンじゃ』

抽象的過ぎる……

もういいや。自分で考えてなんとかしよ。

イメージ。イメージが大切だ。

魔力を体中に行き渡らせるイメージ。

しかし、魔力とは無関係だった生を謳歌していたおっさんにはちよつとわかりにくい。

ならば魔力を電力に置き換えてみよう。そう、つまり今のおっさんは電池を積んだおもちゃだと思うことにする。

今はおもちゃに電力が伝わっていない状態。だから一切おっさんは動けない。

おっさんの動きによつて波立つ水が静まつてくる。

そして電池をプラスマイナスきちゃんと確認した上で差し込むと導線を通つておっさんの体に電気の道が通る。  
そんなことをイメージした。

すると、おっさんの周りの水が波立ち始める。徐々にその波は大きくなっていく。

『ほむ、出来たようじゃの』

大樹からも合格をもらつた。

これで、おっさんは、人へと……進化する！

『さて、次じゃが……』

ですよねー。

肉体活性が出来ただけで進化出来たら苦労しませんよねー。天の声も聞こえねーし。

『魔力を使つたスキルを使用するのじや』

「なるほど」

『はつきり言うとこれが一番難しいぞい。なにせ、使いたいスキルの明確なイメージがなければダメなのじや。人の間では弟子をとりしてスキルを伝えていくなどしてるそうじやが、わしにはおぬしに伝えるべきスキルがない』

魔力を使つたスキルっていうと魔法か？

まあ、木がそんなもん持つてたらそれだけですげーわ。

それにしても魔法か……魔法つてステッキとかコンパクトミラーがないと使えないだろ。あ、これは魔女っ子の話か。

つーかよく考えたら魔法のアイテムとかあっても持てねーわ。

とりあえず、なんか魔法的なものをイメージすればいいんでしょ？どうすつかなー。

あ、やべ……思考がかめ〇め波にしか辿り着かねーわ。魔法ではな

いけど魔法的な感じだしな。

おっさんも男の子ってことだね。

「かーめー〇ーめー……はーつー！」

ジユルアーツ

え、うそ……なんか出ちゃいました。

おっさんの田の前の湖の水が割れ、それでも止まらずにかめ〇め波は突き進む。

つてやべーよ！？ こままだと他の木とかにぶつかる！ かめ〇め波よ、消えるーー！！

おっさんの願いが届いたのかかめ〇め波は木に届く前に消えてくれた。

ふうつ、なんとかなったか。

【エメラルドスタッフビートルは魔力波のスキルを得た】  
【エメラルドスタッフビートルは進化の条件を満たした。進化する

か？】

天の声まで聞こえた。

なんか進化するか？ とかやたら馴れ馴れしいな。

しかしそうやらおっさんは進化できるようになつたらしい。

『まさかこんなに早く習得するとはのう……おぬしには魔力を扱う

才能があつたようじやの』

「……それほどでも」

他に比べれば時間がからなかつたのは確かだが、こんなんでいいの？

『よつぽどスキルをイメージする力が強かつたに違いないわい』

それはあるかもな。

昔は胸が熱く燃えたものだ。いや、今もなお胸を熱くさせむ作品だ。

『ならば、次の修業なんじやが……』

「あ、ちょい待ち。おっさんもう進化できるよ」

天の声は本人にしか聞こえないため、大樹は次の修業をはじめそうになつたので止める。

『え、嘘……マジ?』

「マジだ」

『まさか本当に進化出来るようになるとま……』

なんか聞こえたような気がするけど、気にしないでおいで。

### 【進化するか?】

おつと、再度天の声から催促がかかつた。  
悩む必要はない。

おっさんは天の声に高らかと宣言した。

「進化するー!」

そう宣言すると同時におっさんの体が熱くなつた。湖に浸かっていたためにおっさんの濡れた体から水が水蒸気となつて蒸発していく。頭がフラフラしてきた。

呼吸も、心臓の鼓動も早くなつていぐ。

ついに彼はやんせ意識を手放した。

## おひやご、進化の条件満たす（後書き）

書き終わってから、ふとクワガタに心臓つてあるのかと疑問に思つてしまつた。

調べた結果、どうもないらしい。似たような働きの器官はあるみたいだけど……

でも、あえて書き直したりはしないです。

なぜなら主人公もクワガタには心臓がないと知らないからです。似たような器官（背脈管といつらじこ）を心臓と勘違いしているとつくください。

## おひさん、進化後の姿を見る

暗い視界

奥までどのくらい遠い距離があるのか、それともすぐ近くにあるのか

そんなことすらわからぬに闇の世界

何も見えず、何も聞こえない

だがそこに何者かの気配を感じる

「あんたは誰だ？」

問い合わせる言葉に返答はない。

「おひさん、話し相手が欲しいんだけど？」

やはり何も答えてはくれない。  
もしかして氣のせいなのか？

よく心靈番組とか見た後に眠りつと布団に横になつた時に何者かの  
気配を感じてしまうことはないだろ？  
おひさんはよくあるタ  
イプだ。

だから今回もそんな感じのアレなのかも知れない。  
沈黙の時間が流れる。

＜ ちた 星 つ ＞

何者かが言葉を発した。

どうやら何者かの気配はおさんの『氣のせい』ではなかつたようだ。  
しかし、不意打ち過ぎてよく聞き取ることが出来ない。

「もう一回囁ひてくれ。ワンモアセイプレーーズ」

＜落ちたる星は一つ＞

正直意味不明だ。

「こつは句を言つてこむのだろうか。

「もう少しわかりやすく言葉を頼ります。オッサンが皆物知りつて  
わけじやないんだからさ」

＜一つは強き光を放ち、もう一つは鈍く光る＞

「なあ、何言つてこの？」

＜強き光を放つ星は混沌を導いた＞

「聞けつて」

＜鈍き光を放つ星は新たなる道を拓いた＞

「おこひり、おせんを無視するんじゃありません。含蓄はないか  
もしれんが時たまいいこと言つんだぞ?」

「混沌を導きし星にはその存在が混沌で身を滅ぼさぬよう既に悪意から「」を護る最強の盾を受けた」

もつといよ。

どうせ「」のオッサン、マジうざーい」とか思つてんだろ。

言つとくけどね。おっさん、女子高生とか全然興味ないからね。

諭吉三枚でどう? とか言われても断固跳ね返すから。つーか説教するから。

英世さん一人の超安値だとしても……行つちゃうか? いやいや、行かねーよ。むしろ勃たない。あ、別に歳のせいとかではなくて性癖的にノーサンキューなんです。

「故に新たな道を開拓せし星にはその存在が途切れぬよう再生の泉を授ける」

なんの」とや。ひ。

「一つの星は交わりて互いを滅ぼさんとす

「地上で輝ける星はただ一つなり」

「最後に輝くのは強き光か」

「それとも鈍き光か」

「世界は星の答えを待っている」

【エメラルドスタッフビートルは新たなる種虫人に進化した】ムシピット

【虫人は再生の泉のスキルを得た】

【虫人は昆虫形態のスキルを得た】

【虫人は千里眼のスキルを得た】

【虫人は剛力のスキルを得た】

「んう……」

田を開けるとそこには透き通るような青い空が広がっていた。

『おお、田覚めたよ! じゅな』

聞き慣れた声が聞こえて来る。

声のした方へと顔を向けてみると顔の右側が水に浸かってしまう。

「「ゴホッ、ゴホッ……うえつ、気管に入った」

慌てて起き上がり、手を口へと当てる咳込む。

そう、手を口に当てるのだ。

クワガタだった体では出来なかつた行為。口から手を離してまじまじと見てみる。

指は五本。関節の数も人間と一緒にだ。

ただ、その手の甲や腕には無骨なエメラルド色のガントレットのようなものが接着している。

次に体を見てみる。

こちらはガントレットのようなものと同じ色の鎧みたいなものを着ていた。いや、この鎧みたいなものこそがおっさんの体のようだ。

だって、股間に赤黒いカブトムシの頭部が付いてるらね。

クワガタだったのにカブトムシが付くとはこれいかに。

足も同じく脚甲のようなもので覆われており、どこに戦士やねんと思わぬもない。

手の平や足の裏、太股の内側などは装甲みたいなものに覆われておらず、やや赤みがかつた薄い黄色の皮膚が見える。感触も色も人間だった時のものと変わりない。いや、ちゃんと肌にハリがあるかもな。

つーか顔は？

顔はどうなつてんの？

おっさんは水面に自分を映して見てみた。

そこにいたのはどこぞの特撮ヒーローの方ですか？ と思つてしまいそうな存在。

顔はフルフェイスの兜のようであり、そこの一丁度人間の目のある位置に切れ長の鋭い赤い目らしきものがある。んでなぜか口の周りだけ剥き出し。エメラルド色の頭の頭頂部にはクワガタの顎を模した二本の角が生えている。

もう一度言つぞ、どこの特撮ヒーローやねん！

え……嘘。これが虫人とやらの姿？

つーかこれで人を名乗るわけ？

あ、でもちょっとかっこいいかも……

でもでも、下手したら悪の怪人に見えなくもないかも。

うーん、この頭つてヘルメットみたいに取れたりすんのかな？

……無理だった。

つーかそれより股間つ！

何か隠すもの探さないと……

『二口も黙つとるから心配したせい。もう大丈夫かの?』

おつと、大樹の存在を忘れてた。

つか……

「そんなに眠つてたのか?」

『そうじや』

どんだけ寝てるんだよ。

とゆーかあれは夢だつたんだろうか。

『それにしても無事に進化出来たようじやの』

「ああ。とりあえずなんか下半身を隠せるものないか?」

『すまんが葉つぱくらいしか……』

オーマイゴッヂー。

んでも無いよりマシか。

そして大樹から一番大きな葉つぱを受け取り、下半身に当てて蔓で固定する。

これでひとまずは安心だ。

「ふう、恥ずかしかつた……」

露出狂でもないのに下半身丸出しあきついものがある。  
おつさんは衣食住足りてる日本人なわけだしな。

『それにも……けつたいな存在になつたの?』

「カツコイイじゃん」

『ほむ、本人が言うのならわしがどうひづつべきではないな』

『そうしてくれ』

そつ言つておつさんは湖から出て肩を回して歩いたり、走ったり、スキップしてみたりと体の動きを確かめてみた。

うん、久しぶりに一本足で活動したけど違和感とかは全くない。

「絶・好・調つ！」

無駄に叫んでしまった。

『ほむ、それは良かつた。では、約束通りにこれをやひつ』

大樹がそつ言つと遙か頭上からグレープフルーツ大の紫色の果実が落ちてきた。

それは万有引力に乗つ取り、かなりのスピードで地面に落下したにも関わらず一切傷が付いていない。

なにこれ……めちゃめちゃ怪しい。

「これは？」

『食べればわかる』

ますます怪しく思うが、さすがに今更大樹があつさんをどうこうしようとは思つていなはず。

とゆーか毒でも大丈夫だし。

そう思つた時不安は消え、果実を一口口にしてみる。

果実を一口噛むと甘酸っぱい果汁が口の中に溢れる。ぶつちやけつまい。

貪るように一 個を完食してしまった。

【虫人は斬撃無効のスキルを得た】

食い終わったと同時に天の声が聞こえた。

『どうじゃ？ つまへつけたかの？』

「これって……」

『わしが長い生の途中で伐採されないために身につけたスキルを実として落としたのじゃよ』

そんなこと出来るのか？

いや、実際やつたんだから出来るんだろうな。

それにも斬撃無効とは……木としては生睡を飲み込むほど欲しいスキルではなかろうか

『今更わしを伐採しようとする醉狂な奴もおらんから気にせず受け取ってくれ。おぬしがわしの我が儘に付きあつてくれたこと本当に感謝するぞ』

「こや、いかがりじや色々教えてもらつて……」

『といひでじやがー』

大樹に礼を述べようとしたところ、遮るように大樹が割り込んできだ。

「……なに？」

せつかく礼を述べようとしたところを遮られたのは若干不機嫌だ。

つーかおっちゃんの感謝の言葉を聞けよ。  
なんかモヤモヤすんじゃん。

『おぬしが起きる前に臨時で超長距離根っこワーク会議を開いて他の木に自慢したらの、皆して嘘じやとか言こおるんじや』

「……で？」

まあ、なんとなく先の展開が予想出来るが。

『じゃから他の木におぬしの姿を見せてやつてくれんか？』

大樹の願いにどう答えるべきだろ？

進化出来たのは大樹のおかげだし、願いを聞き届けてあげるのはやぶさかではないが、めんどいんだよなー。

「保留で」

『そこをなんとか』

「えーでも～……」

『タファンの森の大樹だけでいいんじゃ』

タファン？

えーと、確かエルフとドワーフの生まれた森だけか。つまりは一番怠慢できる立場にいる奴つてことか。

『別に期限は定めん。ただおぬしが生きてる間にタファンの大樹に会ってくれれば良いのじゃ』

結局おっさんは大樹の願いを聞き届け、タファンの森の方向へと旅に出ることになつたのだった。

## おひで、進化後の姿を見る（後書き）

さて、オッサンの進化後の姿はどうでしたでしょうか。

私の中では

クワガタ系仮面ライダー + ビーファイターのクワガタ + ライダーマン  
そしてライダーで言う装甲が無い部分が肌つて感じみたいなビジュアルです。

最初は完全なるライダー系の容姿を想像してたんですが、やはり『人』なので『人』の部分がなくちゃねつてことで今のイメージになりました。

まあ、あくまでも作者のイメージなんで細かい部分は読者様のイメージで考えてもなんら問題ありません。

ただ、鎧みたいな着てて、頭にクワガタの顎みみたいな角がある、エメラルドグリーン。この三つだけは外せません。

さて、あと五話以内にヒロイン出せるかなー？

ヒューカヒロインを出す前にあらすじをきちんと書こうと思います。  
ヒューカヒロインを出す前にあらすじをきちんと書こうと思います。

## ねつせき、人と田舎の（前書き）

今回、会話文がちょっと読みづらいかもしれません。ニュアンスだけでも読み取って頂ければ幸いです。

## ねつねつ、人と田舎つ

大樹の願いからタフアンの森に向かうことになつたおっさん。  
めんどくさいけど、生きていらつさに行けば期限は定めないらしいし、  
ゆっくりと行こう。

そう思つたおっさんはクワガタとして生まれ育つたミズドリウムの  
森を散歩するように歩いていく。

インセクトフォーマ

おっさんのスキルの一つにある昆虫形態を使えば前のクワガタの姿  
になることが出来るため飛ぶことも可能だつたのだが、せっかく一  
本足で歩けるようになつたのだ。この感動が続くうちは歩きたい。  
途中で出会つた肉食な動物達からは隠れて森の出口（便宜上そう呼  
ぶ）に向かっていく。戦つたりしないのかつて？ 理由がないのに  
喧嘩を吹つかけるとか好戦的じやないおっさんには無理な話だわ。  
戦わないで済むならその方がいいに決まつてる。とゆーか脳内で快  
楽に変換出来ない痛みは御免被る。

大樹から聞いたらしく、歩いていると色々な木々からおっさんが人  
へと進化したことへの祝福の言葉やこれから旅路へ対しての激励  
の言葉がかかる。

うう……皆なんてええ木なんだ。優しくされると泣きやうになるな。  
年取ると涙腺が緩くなつて困る。

おっさん、感動物にすこぶる弱いんだよ。

途中から見て内容が全然わからんでも、最後の方だけ見て泣いた  
ことなんてしようつちゅうある。

特に養子の子が自分は養子だから愛されてないと想い込んでたけど  
実は養父母にすこべ愛されてた、みたいなシチュエーションにはす  
つ“じく弱い。

……」んな話はどうでもいいか。

む、そろそろ出口みたいだ。

そういうや初めて森の外に出るな。

どんな世界が開けているのか実に楽しみである。

『あ、そこ危ないですよ』

「へ？ のあつ！？」

『人間がなんか仕掛けましたから……って遅かつたですね』

現在、おっさんは網に捕らわれた状態で宙吊りになつてます。これ、忍者とかがくせ者捕らえるための罠に似てんな。

『大丈夫？』

「あ、へーきへーき」

仕掛けを施された木がおっさんに話かけてくる。先ほどちよつと遅い警告もこの木のものだ。

「獲物がかかつたぞーっ！」

「よつしゃー！ 久しぶりに肉が食えるべ

「わーのしかげがよかつだんだがうな」

「オラの戦術眼がよがつだんだべ」

ほどほどに訛りのある言葉で現れたのは四人の屈強な男達。

全員、皮の鎧に身を包み込んでおり耳とかの諸々のパーツは人間と変わりない。明度の違いはあれど全員黒髪であり、どことなくアジアンな顔立ちをしている。

なんかこえーな。  
オヤジ狩りの一团じやねーよな？

ダンディハント

「さーで、獲物は……あれ、なんだべ?」

「人でねーが?」

「おいおい、やばぐねが? 間違つて人ば罠さかけでまつだ」

「おーい、大丈夫だが?」

ふむ、話し合いを聞くにいい人達っぽいな。

「大丈夫大丈夫。それより降ろしてくれない?」

「へば、ちょっとこさ待つでろ」

しばらくして地面へと降ろされた。

「すいませんでした」

四人が揃つておっさんに頭を下げる。

「まさか、こんな田舎いなかの森に人が入つでくるなんて思つでながつだ  
はんで」

「いやいや、おっさんも驚いたよ。巧妙な罠仕掛けるねー」

「だべ? 自信作だ」

男達の一人が下げてた頭を上げて誇らしげに語る。

「自信があるのもわかるな。全然わからなかつた」

まあ、考え事してて注意力が散漫だつただけだが。

そうじやなかつたら、木の注意によつて避けていたことだろつ。

「んでも、ホーンラビットどがを捕まえるにはこんぐれえの罠じや  
ねーとダメなんだ」

「あいづら、ちゅうじでも違和感ば感じたら眼にせきがよんねーが

んな」

「んだんだ」

ホーンラビットって、あのロップイヤーさんか？

忘れもしない、寝てるおっさんを角で突いてたあいつらの姿だけは…  
……よく考えたらあんまり恨みに思つてないんだよね。どうでもいい

いつて言つか……

「ホーンラビットってうめーの？」

「ん？ まあ、ルーパーだな」

「ハイキングベアーの方がうめえげっちょ、ありやつええがら」

ハイキングベアーとは多分一足歩行してた熊のことだね。  
おっさんはこいつを見かけたらすぐに逃げる。

「うん、そつか。大変だね。じゃあ、とりあえずお詫びの品をくれ

「は？」

「え……」

場が畠然とした空氣に包まれる。

そりやそうだ。

人々の話、獲物を捕らえるために仕掛けた罠にかかったマヌケはお  
っさんの方ではある。罪悪感もあって謝罪した彼らではあったが、  
おっさんの友好的な態度に胸を撫で下ろしていくに違いない。  
だが甘い。

普段のおっさんなら笑つて許して終わりだらうが、今のおっさんの  
状況は無一文。

「ひみつ機会は活用せねば。

「えつと……」

「とりあえず金銭での詫びを入れてくれ」

「オラ達、ほどんじ自給自足だがり……金はあんま持つでねえ」

「よしわかつた。あんた達全員その場でジャンプしろ」

おっさんの言葉に対して男達は素直にその場で跳びはねた。  
おっさんは素直な奴は大好きです。つーか素直すぎる氣もするけど  
ね。

そして男達のジャンプに合わせて聞こえる金属音。

「お、持つてんじやん。出しなさい」

「い、いや……これはナイフの音だあ」

「とつあえず出しなさい」

無駄に強気なおっさん。

だがしかし、内心逆上されたらどうしようかとドキドキものです。  
だけどここからのおドオドした感じが、その心配は杞憂だと思われる。

オッサンとは反発する若者は苦手な奴が多いが、従順な若者には強  
気な生き物です。おっさんもその内の一人さ。

差し出されたのは刃渡り10㌢ちょいの外見果物ナイフみたいな  
物。つーか果物ナイフにしか見えない。  
りんごでも採りにきたのか?

まあ、毒りんご的なのがしかないけどね。

狩りに出た人間の装備としては貧弱だ。ナイフの良し悪しが分から  
ないおっさんでもこれはナマクラだと判断出来る。

「はー、返す」

「あ、どうも……」

「他の奴らも提出ー」

おっさんの中にはまたも男達は素直にそれぞれ金属音の元を差し出してくる。

ほんと、じんなに素直で良い奴ら初めてだ。  
差し出されたのは全員似たり寄つたりの品で、おっさんの食指は全くといつていいほど動かない。

「はあ……」

自然とため息がこぼれる。

ため息をひとつ吐くと幸せがひとつ逃げてくなんて俗説もあるが、  
この際仕方ないだろ？

「……なんが、すいません」

謝られた。

ここからは全然悪くないのに。

やべ……おっさんの罪悪感がチクチクと刺激される。

「ひからい調子に乗ってしまったようだ……」

「いやいや、オラ達が悪いんです」

「なんだ。貧乏で何もあげられるもん持つでねえのがわりいんだ」

「お前ら……」

いい人過ぎやしませんか？

「好きだぜ」  
「……え」  
「あ……」

「ぬう……」

「オラ、嫁つこがいるんだばっかりよ……」

「やつこつ意味ではない。おっさんは女好きだよ?」

めちゃくちゅって頭に付へへりこな。

「それにしても優しこのはいいが、優し過ぎのやつお前ひ

「だつて……なあ?」

「ああ」

「んだ」

「何? なんで知り合い同士、田で会話してんの。おっさんも話の輪に入れてよ」

「だつて、あんた……鎧は着てつけども股間は葉っぱで隠してるべ  
らうだがら、哀れで……」

……うん、まあ、そうだね。

おっさん、そんな格好してたね。

自然と受け入れてたよ。

とゆーか胸とかは鎧じやなくて一応、おっさんの肌なんだけどね。  
感触あるし……

つまり、全裸に葉っぱだけだつた。

「…………じゃあ、腰に羽織るもんない?」  
「どんぞ」

差し出されたのは四枚のタオル。

おっさんはそれで簡易版の褲を作成し、葉っぱの代わりに股間を隠すのだった。

……あ、激しい動きだと取れちゃうな。



## おひねこ、人と出合つ（後書き）

いつか来るかもしない質問を先に回答しておきます

Q・なぜ言葉が通じるのか？

A・ファンタジーだからです

Q・主人公は戦わないのか？

A・そのうちあるかもしませんが、少なくともそこそこ先の話です

Q・主人公の名前って？

A・一応、次話にて名乗る予定

私が現段階で思い付くのはこれくらいですかね。

他に何かあれば遠慮なくどうぞ。ただ、ネタバレになるような質問には回答できません。

## おっさん、名乗る

タオルのお礼と書いてはなんだが、スキル木々の声を活かして狩人達の狩りを手伝うこととした。

要はホーンラビットがよく通る道やホーンラビットの餌場などを教えてもらえばいいだけの話だ。樹木達はおっさんの味方なので基本的に何でも教えてくれる。

狩人達も良い狩場知ってるよと書いてやつたら両手を挙げて大喜びした。

そんなに喜んでくれるのは嬉しいが、結果が出てからにして欲しいものだ。

あと、もう少しあつさんの素性を疑うとかないわけ？

客観的に見ると結構怪しい奴よ？

まあ、説明するのもめんどくさいから聞かれない方が都合いいんだけどね。

よし、気分がいいからサービスだ。食える山菜とかキノコも採つてやんよ。

結果として狩りは成功だった。

成果はホーンラビット六匹。いや、ラビットだから六羽の方が正しいのか？

とりあえず成功だ。

おっさんの指定したいくつかのポイントに狩人Cがおっさんの引っ掛けた罠を設置し、獲物がかかるまでひたすら待つ。そしてかつた獲物を狩人A、Dと協力して捕まる。その後にまた罠を仕掛ける。

これを狩人達が繰り返している間におっさんは狩人Bを連れて食用

植物を取りに行つた。

狩人Bもそこそこ食用植物には詳しかつたが、木の声を直に聞けるおっさんほど森の植物に詳しい奴はいない。

一時間もすれば両手に抱えきれないほどの食料を得た。

それにしても動物を殺す瞬間つて惨いよな。おっさんも真つ当な人間だつた頃に田舎で飼つてた鶏を絞め殺して羽根筆つたことがあるけど、途中で祖母ばあちゃんに変わつてもらつたもん。

今じや、食料確保してゐる間に時々見かける事のある弱肉強食の世界によつて見慣れた光景とは言え見ると気持ちが悪くなつてくる。

「大丈夫だか？」

「……そんなに大丈夫じゃない」

「あんた、グロ耐性のスキル持つてないのが？」

グロ耐性のスキル。

そんなもんがあるなら是非とも欲しいもんだ。

「どうやつ……」

どうやつたら獲得できる? と聞こいつとした口を開きます。

スキルを得る方法は経験か修業。

ならばグロいものを率先して見たり、運悪く見てしまつた奴が得るスキルなのだろう。

ネット画像とか写真とかならまだいいけど、隣でグチャグチャやつてんの見るのはいやだ。

「大丈夫だあ）。解体作業ば百匹も見れば取れつから～」

励ますな。

別にグロ耐性ないからって落ち込んでるわけじゃない。

「んでも、これだけ取ればカカアに怒おこられなぐでいいな」

「これもあんたさんのおがげだ～」

「あんたも村さ来い。わーの作った野菜ばやる」

「オラの作った野菜はうめど～」

すっげえ笑顔でおっさんの方を見てる狩人達。  
笑顔が眩しいぜ。

それにもしても、野菜作ってる奴つてお礼とかに大抵自作の野菜あげるって言い出すよな。おっさんの実家の連中もそうだったし、農家の友達もそうだった。

まあ、嬉しいんだけどね。

「狩人A、B、C、D……じゃあ、誰か泊めて？」

沈黙が降臨した。

なんか悪いこと言つたかな？

あれか？ 「泊めて」はまずいか？

芸能人が田舎に泊まるテレビ番組でも難儀することがあるからなー。でもテレビが入るわけじゃないからハードル低くね？

いや、よく考えると今日会つた奴を泊めること自体がレベル高すぎか。

例え彼らの家が掘つ建て小屋であつても褒める自信があるのに残念だ。

「なあ」

沈黙を破るようにAが口を開く。

「狩人エー、ビー、シー、ティーっておいら達のことだが？」

「うん、そうだけど。」

なるほど、まずは他愛ない話をしつつお泊りを拒否るわけだな。  
はつきり言つてくれていいのに……

「そういうえば、お互い名乗りあつてながたな～」

「まんざ名乗りあつのが礼儀でねえが」

「んだ」

とこつわけでお互いに自己紹介する運びとなつた。

とつあえず簡潔にまとめてこいつ。

「だば、おらがらいべが」

狩人A。本来の名前はスナー。

スナーとか言いつつ、肌は日に焼けて茶色だ。

彼は四人の中で一番でかい。

また、Aを冠するだけあって彼らの中のリーダー的存在だ。既婚者。

なお、嫁の尻に敷かれているらしい。また、嫁が妊娠中。

「次はわの番だな」

狩人B。本来の名前はトイース。

一緒に森で収集した男だ。

顔立ちはまだ二十代だというのに可哀相な頭をしている。でも既婚者。

「だらわーがいぐど」

狩人D。本来の名前はスサウ。

罠の名人。

身長は小学生くらいしかないけれども、あごひげの影響でかなり年がいつてるように見える。やはり既婚者。

「最後はオラだな」

狩人D。本来の名前はウエスト。

他の三人に比べると細い。だが、筋肉質だ。

また、彼らの中では頭がいいらしい。はあ……既婚者。

全員既婚者だよバカヤロー！

なんだよ。三十過ぎても結婚出来なかつたおっさんへの当てつけか？  
くやしくないよ？ だって、三十過ぎても結婚しない野郎なんて  
いっぱいいるしー。

「んで、あんたは？」

今度はおっさんの名前はたか……

「おっさんの名前はたか……」

ちょっと待て。本名を名乗つていいものか……

こいつらの名前を聞く限り日本の名前だと浮いちゃわね？

とゆーかすでに以前のおっさんは死んじやつてるわけだから新しい名前が必要ではなかろうか。

とは言つても西洋風な名前なんて咄嗟に思いつかん。本名を揻るか？  
……ないな。

うーん……一旦持ち帰つて考えたい。

だけど、考えれば考えるほど堀堀に嵌まる気がする。

だったら……」ひしょり。

「おっさんには名前がない。この森で生まれ、この森で育ったが故に。だからどうだらう、君達があっさんに名前を付けてくれないか？」

「おら達が？」

聞き返すスニーに頷いて返す。

自分で名前を考えるのが面倒ならば、他人に考えてもりおっ作戦だ。

「でも、なんでわー達が？」

「んだ。自分で付けねばいーべ」

まあ、こうくるわな。

理由がめんどくさかつたからじゃダメだよな。

どうやつて言い訳しよう……

「それはだな……」

考える。考えるんだ。

自分を叱咤激励する。

すると、天啓のようにパッと頭に最適な言い訳が浮かんだ。

「名前ってのはさ、自分で付けるものなのか？ 君達だって親に付けられただろう？ つまり、血の繋がりがあるとはいえ他者に名付けられたはずだ」

おっさんの言葉に四人が理解の表情を浮かべる。

「だからこそ、信用出来る君達におつたこの名前を付けてもらいたいんだ」

ここで信用していることもアピールしておいて、お泊まりの許可をもらいやすくする算段を練る。

ふふふ、おっさんたらなんてクレバーなんだ。

「よ、よし。おら達がいい名前付げでやつからー。」

「任せどぞ」

「どんなのがいいべ？」

「テソロとかどんだけ？」

「それは今度生まれるおらの子供の名前だべー。」

四人で固まつて話し合つてくれている。

はてさて、一体どんな名前を付けられるのかな？

よほど変じゃなければ、どんな名前であつても受け入れるつもりだ。その名前でこれから生きていこうと頼り。

近くにある木に寄り掛かつて座り、結果を待つこととする。

『あんつ』

「おつと、すまん」

びつせり寄り掛かつた時に木の性感帯に触れてしまつたようだ。

『いいんですよ。それより名前付けられるみたいですね』

「え？ あ、うん」

『その旨を報告しましたら、ラウルス様がわしが名付けると言つてましたよ』

「へー」

ちなみにラウルスとは大樹の名前である。

だけどおっさんの中では大樹は大樹。名前などない。

「参考までに何て言つてんの?」

『えーと、ですねえ……ムシジビト一かムシジビト で迷つてゐるやうです』

「却下つといで

『はい』

大樹に名前付けてもらひことを考えつかなくて良かつた。

そういうえば、修業中にこの森のほとんどの木の名付け親は大樹だと聞いたことがあつたな。あの杉15065みたいな感じのセンスの力ケラもない奴。

絶対名付けられたくないね。

自分の案が即座に却下されたことで大樹が激しく落ち込んだ事はここで語るような事ではあるまい。

そういうしてゐる内に話し合いの終わった狩人達がおっさんの元に近寄ってきた。

「いい名前付けてくれたのかな?」

「最終的に三つ候補ができるだ

「ふーん、そつから選ぶわけね」

おっさんにも選択肢を『える』こと、華を持たせてくれてるのかな?

「どんなんがあんの？」

「エメ、ラルド、グリーンの三つだ」

そつかその三つの中ならどれかな……って…?

「なにそれっ!? 全部見た田からじやん! なんでそんな安直になつた?」

エメ、ラルド、グリーン。繋げて読めばエメラルドグリーン。まんまだ。

「いや～、パツと思いつぐのがなぐてえ」

「スサウがプリンプリンとかふぞろびっかりあ～

「おめだつて、悪ノリしてお前ばアナルにじょつとか言つてたつペ

なんでここのりこんなに学生のノリなの?

判断間違つちやつたかな～。

とりあえず真面目に考えてみる。  
プリンプリンとアナルはないな。  
でも、アナルつて響きはちょっと惹かれるものがあるから将来息子  
が出来たら嫌として使わせてもらおう。  
んで、エメラルドグリーンに関してだが、安直ではあるがわかりやす  
い。

面倒だし、この中から選んで。

まず、エメ。

エメちゃんと呼ぶ姿を想像してみる。

なんかひょうきん者のイメージだな。ダンディーなおっさんには合  
わない。よつて却下。

次に、ラルド。

これ単体で見れば、そこそこな代物だ。響きがいい。おっさんの名

前の第一候補にしよう。

最後に、グリーン。

歌を唄うイメージがある。響きは悪くない。だけどどことなく主人公のライバル的ポジションっぽい感じがするのはなぜだろう？

「ラルドだな」

吟味した結果、やはりこれが一番しっくりくる。

「おっさんの名前は今日からラルドだ」

「そうが」

「よひすく、ラルドさん」

「いい名前だあ」

「名付けだオラ達も納得だべ」

【虫人は固有名ラルドを得た】

天の声が聞こえた。

おっさんの名前はラルドで本決まりしてしまったようだ。  
だが、これでいい。

おっさんはこの世界で生きていこうのだから。

こうして名前を得たおっさんは狩人達に付いていくて、彼らの村へと訪れるのだった。

ちなみに泊めてくれと頼んだ時に沈黙が降りたのは、おっさんが自分達を記号の如く認識しているのに気付いてちょっと傷付いたためらしい。

泊める事自体は奥さんに聞いてみないとわからないとのことだった。

なお、おっちゃんはラードとこつね前が豚の脂のことでだとは知る由もなかつた……

## ねつむえ、名乗る（後書き）

固有名詞はだいたい適当につけてます。  
主人公の名前も本当にエメラルドグリーンから取ったんですが、まさか適当に取った名前がこんな意味を持つとは……まあ、ありかなしで言えればあります。むしろ彼には合ってる気がします。

## おっさん、旅立つ

「ラルドセーん、このキノハウヒで食えつべか？」

拝啓、大樹様。

「おっさんは食える。だけど、トイース達はダメだ。食つたら体が痺れて動けなくなるぞ？」

お元気ですか？

まあ、根っこワークでお互いの近況はよく知つてゐるじょうが、改めて報告しようと思ひます。

「危ねーデジだつたなー」

おっさんは今、三ヶ月ほど前に出会つた狩人達の村で彼らと同じく狩人として生活しています。

「この実は吃えるべか？」

最初は苦難の連続でした。

だつて村人の視線、特に女性の目がドライアイスみたいに冷たかつたからです。

「うん、吃えるよ。スノーの嫁さんみたいに産後の人なら丁度いいんじやないか？」

それもこれも、村に着いた時におっさんが腰に装着していた簡易型

の禪が外れていたのにも関わらず、それに気付かないで村の中を闊歩したのが悪いんだと思います。

露出狂の誤解を解くのに大変苦労いたしました。

今ではちゃんとした禪を着用しています。あくまでも禪のみで、他はなんも着てません。なぜなら装甲的な身体のせいでおひさんに合う服がないからです。

まあ、慣れましたけどね。

「おお、キャロルにいって帰んべ」

女性の反応はすこじぶる悪かつたとしか言こようがありません。  
あっちに行つては逃げるよう視界から消え去り、そっちに行つては露骨に嫌な顔をされました。

だけどなぜでしょつか。

……ゾクゾクしました（悦）

「キャロルって、いいケツしてんだよな

あの冷たい視線がたまりません。

しかし、彼女らは皆旦那付きです。つまりは人妻。

基本的に旦那が知らない野郎なら大興奮してしまうのですが、先に旦那達と仲良くなつてしまつと、人妻と言つよりも○○の嫁と思つてしまい、正直萎えます。ゾクゾク感は半減です。

おつさんは友人の嫁に手を出すほどひとでなしではありませんからね（笑）

「ラルドさん。いや、ラルド……嫁に手え出したらぶつ殺すかんな！」

あ、友人も増えました。

男なんて一緒に酒飲んで夢でも語り合えば、そこそこ仲良くなれます。

あの夢なんかねえよって奴らは、下ネタで落としました。  
どこにいっても男のエロさは変わらないとしみじみ思いました。

「いや、キャロルはケツはいいんだが、胸が更地過ぎて欲情しないんだよね。だからスナーはきっとロックライミングが趣味なんだな」と常々思つてる」

話は変わりますが、つい先日、村の畠におっさんが植えた作物の収穫がこの間ありました。

早過ぎると思うかもしませんが、実はおっさんには植物の成長を促進する秘められた能力があつたのです。

「それは抱いてるおらに失礼でねえが。キャロルは確かに胸はねえけんども、美人だ」

きつかけはおっさんが種蒔きに参加した後のこと。

成長具合が気になつて仕方がなかつたので、早く芽を出せと祈つたことからはじまります。

その後、あれよあれよという間に作物が成長していつたんです。これによつて、おっさんはどうやら植物成長促進というスキルを持つていたことが判明しました。そういうえばエメラルドスタッグビートルになつた時にそんな感じの天の声が聞こえたかもしれません。

「うん、美人（笑）だよな。ま、おっさんはもっとボン・キュッ・ボンなおねーちゃんがいいけど」

植物成長促進のスキルが判明してから女性達の態度がすこく軟化しました。

でも、どうなく残念な気持ちなのはなぜでしょう……

「だったらオラの嫁ば狙つてんのが?」

村長さんにも村人として永住しないかと言われました。おっさんとの心の距離を縮めようと必死なのが端で見ててもよくわかります。

「ウエストの嫁ははつきり言つて顔の造形が好みじゃないなー」

びつするかはまだ決めてません。

だけど、わりと前向きに検討しようかと思つています。

「ラルビさんは女の好みにつむれ過ぎるんでねえべが?」

この村はおっさんに仕事をくれました。

そしておっさんが生活するのに必要な物を無償で提供しててくれました。

「好みつてゆーか、二十五歳以上でナイスバディな美人がいってだけ。これだけ満たせばどうでもいい。おっ、美味そうなキノコみつけ

仕事ではいなくてはならない存在として重宝されています。無駄に自信がつきました。

落ち込むこともあるけれど、おっさん、この村が好きです。

「明日元で村出ることとした」

「……え？」

突然のおっさんの発言に驚いた表情でその場にいた全員がおっさんの顔を見る。

今度は何を言い出したんだコイツ？　みたいな表情がありありと浮かんでいる。

ここは村で唯一の酒場。

内装は西部劇にでも出てきそうな造りで、扉は例のパコパコするタイプのやつだ（ウエスタン扉）

一階に宿泊も出来るので、おっさんは現在そこに住まわせてもらっている。

今日は狩りの成果もそこそこ良かつたので東西南北の四人と祝杯を挙げてるというわけだ。

ちなみに東西南北とはトイース、ウエスト、スサウ、スノーを一ぐくりにした呼び名だ。

その現場でおっさんは自身の今後の予定を告げた。

はっきりいえば急な話だ。おっさんは事前になんのそぶりも見せたことはなかった。とゆーかわざと決めたんだから当たり前だ。

突然の引退は周りに迷惑をかけることも理解している。

だけどおっさんは元々外様だし、問題はないと思つ。

手紙口調でのこの村が好きだとは言つたが、ずっとこのまま一言も言つてない。

あくまでも前向きに検討すると言つた政治家答弁だ。むしろ「いつこう発言が実現されることはあるまい」のではないだろうか？  
つーか最近、大樹が「まだタファンの森には行かんのか？」って根っこワークを通じて村にある木に言付けてくる。  
どうやら永住じゃうな勢いで村に馴染むおっさんを杞憂してゐるらしい。

そこまで怠慢したいのかよ。

「随分と急でねえが？」

「んだ」

「用事があるんだよ」

「だけんども……」

引き止めよつと言葉を紡ぐ東西南北の面々。  
お前ら、そこまでおっさんが好きか。

人気者だなー。

だけどな、おっさんが村を出る決意をしたのはお前らのせいでもあるんだぞ？

ぶつちやけ羨ましいんだよ。

嫁と仲良くキヤツキヤウフフしゃがつて……

目に毒、心に罇ひびなんだよ。

この村は二十歳越えた奴は男女を問わず、ほとんど結婚済みだ。  
なんかしらないけど心に焦りが生まれる。  
結婚願望はそれなりだつたんだけどなー。

まあ、でも……

「こつかこの村には帰つてくるよ。今度は嫁を連れてな」

農家とか狩人とかはおっさん的には天職っぽいしな。  
それにやはり東西南北との固い友情はあるわけだし。

「……だつたらー、せめでもう少し出発ば延ばせねえべか？」

「んだ、明日つてのは急過ぎるつペ」

いや、確かに急だけどさー……

「事前に言つたら村長が全力で引き止めにきそうなんだよなー。それ……」

「それに？」

一拍置いて四人の顔を見回す。

おっさんが何を言つのかを期待して、生睡<sup>ゴクリ</sup>って感じだ。  
やれやれ……なら、その期待に応えてやろうかな。

「親しい奴にだけ告げてフリと消えるつてのかっこよくね？」

さありいのダンディを加減に痺れるぜ。

「ねえわ」

東西南北が口を揃えて言つた。

まったく、ダンディつてのが分かつてねーなー。

翌日、宣言通りにおっさんはまだ日も昇っていない早朝に村を出た。  
村人の朝は異常に早いのだから仕方ない。

起きられなかつたらまづいのでおひさんは徹夜だ。  
ずっと酒を飲んでいた影響でフランフランである。

見送りは四人の男達のみ。

こいつらもおっさんに付き合つて夜通し飲んでたので具合が悪そつだ。

なんかもう、出発は明日でもいいんぢやないかと思わなくもないが、  
そしたら明日は明日でこんな状態になつてそつなので無理を推して  
今日出発する。

「いじりで見送りはいいぞ」

「だらもつ家さ帰るじゅー」

「んだらまだなー」

「まだ来いよ」

「んだらまんつ」

名残惜しさは微塵もない。

わりとあつたりと東西南北は背を向けて歩き出す。  
さ、寂しいなんて少ししか思つてないぞ？

去つていいく東西南北の背を見つめていると、不意にスノーが振り返  
る。

「ラルドさん！ 嫁ば見つけだらまた帰つてこよー！」

そしてスノーと同じように三人も振り返つておひさんへと声をかけて  
くる。

「帰つでくるまでにラルドさんの家ば造つておぐがらなー」

「ここ女つがまえりょー」

「とりあえず素を出すのは控えどナーハー」

口々に投げかけられるホール。

そつ、彼らと交わした言葉にひよなうはない。

いつか再び余えると確信し、『また』と全員が言った。

おっちゃんは四人の気持ちに応えるよつて声を張り上げる。

「また……ウツ……」

やばい……顔を張り上げたせいで腹から込み上げてくるものが……  
ここで込み上げてくるのが涙でなくてどうするー。

ゲロはダメだ。

折角の微感動場面が台なしだ。

せめて……あいつらが各自帰るまで耐えるんだ……  
くわつ、こつまで手を振つてやがる。わざわざと帰れ……

くわつ……むわ……ダムが……決壊する……

しづらへひまじ  
この間待つてお

はあー、スッキリした。

んじやいこつと。

背後は振り返らない。

むしり振り返ることができない。

おっちゃんの吐瀉物はそのままだ。

きつと大地へと還り、綺麗な花を咲かせることだらう。

「ひしておひさんはやつと旅に出た。

東西南北の四人は折角の旅立ちのシーンを台なしにした一人の男の背中が見えなくなるまで見送っていた。

「吐いだな」

「うん、吐いだ」

「盛大にな」

「台なしだべ」

「んでも、ラルドさんらしいな」

「あ、それわがるべ」

「あん人はあれでいいんだ」

「ちゅーか、わーもなんが吐ぎそうなんだけど……」

「もらひゲロかよ」

「あ、ダメだ……ウオエツ！」

「あーあーあー……」

「まつだく……」

四人は笑いながら家路へと向かう。

四人が一晩中飲んでいたことによつて無断外泊の形になつてしまつたがために、嫁が家でどういう心境で待つてゐるかななど考えもしないで……

ちなみに最も被害が大きかつたのはスノーであつた。



## おつかれ、旅立つ（後書き）

オッサンの村での生活をダイジョブでお送りしました。  
植物成長促進のスキルは作者自身も忘れてましたね。

## おっさん、捕まる

それは今にも雨の降り出しそうな雲に覆われた日のことだった。  
すでに村から旅立つて四日といつところだ。

たつた四日と悔ることなかれ

おっさんは<sup>インセクトフォーゼ</sup>昆虫形態のスキルを使ってクワガタの姿になることが出来る。

つまりは飛べるのだ。

そんなおっさんの移動距離は一般ピー・ポーとは比べものにならないほどだからね。

まあ、初日は途中でへばつてあんまり進めなかつたけど……

だけどそれを帳消しにして有り余るオッサンの勇姿。割れながら惚れ惚れする。

しかしながらだ。

おっさんは性格のせいなのか分からぬけど、わりと友達はいるタイプなのよ。

まあ、逆に嫌われる場合はとことん嫌われやすくなるんだけどね。まあ、それは置いておいて、つまり何が言いたいかと云つておっさんは寂しいんですつ！

そりや、移動をやめればそりゃにある木に話しかけて相手してもらうんだけどさー。移動中はそんなこと出来ないわけで……東西南北の奴らと交流持つたことで人と触れ合つことを思い出して寂しさ倍増しちゃつてんだよ。

一人旅も嫌いじゃないけど、ワイワイ楽しい旅の方が好きだ。  
旅は道連れつて言つんだし、東西南北の連中も連れてくじやよかつた。

どつかに旅してゐる集団とかいなかな？

いたら混ぜてもらうのにな。

まあ、おっさん以外全員が知り合ひつて状況は疎外感が半端ないけど、話を下ネタに持つていけばおっさんのターンに持ち込める。

「なあ、周辺に誰かいないかな？」

ということで近くにいる木に周辺の情報を聞いてみる。

木の一本も生えてない荒れ地などなら別だが、一般的な大地の状況について彼らが知らないことは少ない。

彼らは無駄に他人の秘密を知つてゐる。また、それを木にしか言えなかつた反動なのかやたら口が軽い。トイースが外で嫁と子作りに励んだ場所とかはあんまり聞きたくなかったぜ……

『任せんしゃい。十秒あれば根っこワークで周辺の奴らから情報がくるけん』

何より、何度も言つてる気がするが、こいつらはおっさんに協力的なのだ。

おっさんることは根っこワークを使って情報がいつてるらしく、いきなり話しかけても嫌がつたり疑問を感じることはなく、むしろ喜々として話し合ひに応じてくれる。

程なくして、周辺にいる者達の情報を受け取つたおっさんはそいつらのいるところへ向かつた。

その集団の姿はさう動かないうちに見えた。

とは言つてもまだ距離はそこそこ離れている。

しかし、おっさんの田には新聞の活字よりはっきりとその様子が見て取れた。

これはおっさんが進化することで手に入れた千里眼のスキルの恩恵だ。

千里とは大体四千キロくらいだった気がするが、さすがにそこまでは見えない。しかし、十キロぐらいならば余裕で見ることが出来る。本気を出せばもっとといけるに違いないが、まだ試してはいけない。とゆーか青看板みたいな「〇〇まで〇キロ」みたいな指標がないからしきりがないよね。

さて、話は変わって集団の様子を述べよう。

集団とは言つても見える範囲には五人しかいない。テントを張つてるからその中に誰かいるかもしれないのに、五人以上ということだ。それでこの集団、物々しいことこの上ない。

体には重そうな鎧、腰や手には剣やら槍やらを携えている。顔はヤの付く職業のお方みたいな強面で、傷やら入れ墨みたいなのが付いている。

ぶつちやけ怖い。

なんつー物々しい集団なんだ。

こんな奴らに財布出せって言われたらおっさん即効で逃げるが。え？ 差し出さないのかって？

嫌だよ、もつたいない。

あいつら人からカツアゲした金で絶対キヤバクラとか風俗行くんだよ？

おっさんだつて滅多にいけないつーのにそのおっさんの金で行くとか許せますか？ いや、許せません。

それで捕まつて殴られて脅されるならそれがおっさんの運命。逃げられたらラッキー。

むしろ財布に入ってる免許証やら保険証見られる方が怖いよ……

まあ、なんだかんだ言つてそういう方々とまともに会合つたことがないから好き勝手言えるんだけどね。

うーん……それにしても声をかけるべきかかけざるべきか悩むな……普段なら悩まずにスルーするんだが、寂しさ募るぼっちなおっさん的には会話出来るなりこの際ヤーさんでもいいとか思つてきてるわけで……ん？ スルーする？ ぶほつ！ スルーするとか秀逸なダジャレが偶然出来てしまつた。

言いたい。これは誰かに伝えたい。

よし、彼らに言つてみよう。

なーに、おっさん渾身のダジャレに全員大爆笑するだろ？ だから全部はノープロブレムだ！

などと、浅はかにも思つていた時期がおっさんにもありました。  
現在おっさんは縄で縛られて轡を噉ませて地面に横たえられています。

なぜ、こんな状態になつたのか。

理由は簡単に推測出来るかもしけんが、あえて言おう。

おっさんは盛大に滑つたのだ！

あれだよな。

発見されて開口一番に「貴様何者だっ！」とか「怪しい奴めっ！」とか威圧的に言つてんのに「あんた達が見えたから仲間に入れて

貰おうと思つたんだ。ホントはスルーすると「なんだらうけどね？」

スルーする、スルーする……笑えない？」とか言つたのがダメだつたのだろう。

もう、ダジャレを放つた瞬間に「あ、これダメだ」と思いましたよ。それなのにダジャレだつてことに気付いてない可能性を考えてスルーするつてとこの説明までしちゃつた。

寒さは倍率ドン更に倍。

清々しいまでに事態は悪い方向に転がり、怪しい奴つてことで取つ捕まつた。

縛つたのがむか苦しい男なら纏を噛ませたのもむか苦しい男。

テンショントがるわー。

せめて女はいないものか。

「報告にあつたのはその男かしら？」

おっさんのが想いが天に届いたのか、鈴のような響きを持つ声があっさんの耳に届く。

視線を動かしたおっさんの目に飛び込んできたのは、深紅のローブを身に纏う高校生くらいの女の子の姿だつた。

周りにいる男達よりも頭一つ分は背が低いが周りの男達はおっさんよりもでかいので、女性としては高身長であろう背丈。これだけ見ればおっさんのストライクゾーンにいるのだが、腰元辺りまで伸びたローブに負けないくらいに鮮烈な赤色をした髪をツインテールにしており、それが彼女の容姿を幼く演出している。ま、胸の発育具合が残念なのも一つの要素か。勝ち氣そうに釣り上がつた瞳やこちらを見て微笑む仕草などはおっさんの好みなのだが残念なことに……

おっさんの好みではない！

要はストレートだつたらストライクだつたのに、大きく縦に割れるカーブを放つたせいでベース手前でワンバウンドしてキャッチチャーに届きました的な感じ。

美少女ではある。それは認めよ<sup>う</sup>。だが、おっさんは美少女には興味がない。美少女から美女にクラスアップしてからお会いしたかった。あ、胸ももう少し成長して欲しいな。

「アイリス様、この者いかがいたしましょうか?」

「殺しなさい」

「はい?」

え、何て言ったのこの娘?

殺しなさいとかいきなり過ぎやしないか?

もしかしておっさんの心の声が聞こえちゃったのかな?

「かし」まつました。おこ

重厚な鎧に身を包んだ巨漢の声に、おっさんの近くにいた細身の男が腰から剣を抜き放つ。

その剣は鈍い光を放ちながら上段へと振り上げられた。

「んーんー!」

必死に止めてくれるよう<sup>に</sup>声を張り上げるが、如何せん轡によつてその声が他者に理解される事はない。

「あら、何か言つていひよ<sup>う</sup>うね?」

「今生への別れか怨嗟の言の葉かと」

「それは是非とも聞いてみたいわね」

「かしこまりました。纏を外せ」

巨漢の男の言葉に剣を振り上げたままの細身の男とは別の顔に入れ墨のある気合いで入ったに一ちゃんがおっさんと纏を外す。

「さあ、あなたの死に際の呪いの言葉を聞かせてちょうだい」

少女がやたら期待の籠つた瞳でおっさんを見つめる。

どうやら少女は特殊なご趣味をお持ちのようだ。

これが俗に言う変態なのかもしれない。

「とりあえずおっさんを殺すのは待とつか？」

「嫌よ」

「なして？」

「だつてわたくし人が死ぬ直前の絶望や怨嗟の声が好きなんでもの。殺さなければ聞けないでしょ？」「

それが本音からくるものなら、この娘はかなり危ないよな？  
おっさんつてば知らず知らずのうちに虎穴に入つてたわけか……才

ーマイガット！

「……殺さないで下れこ」

「ダメー！」

おっさんの切実な願いは可憐らしく断られた。  
どうする？

どうすんの？

どうすりやいいの？！

おっさんめっちゃピンチじゃん！？

絶体絶命とかそんな雰囲気じゃん。

「ハハで丸め込むとかそんなこと出来るレベルじゃない気がする。あつちはおっさんを殺す気満々過ぎてどうしようもない。よし、いじは法を盾にしよう。」

「人殺しは犯罪ですよ？」

「あら、いじがどこかの町の往来で、わたくし達の他に誰か目撃者でもいれば別ですけどこには町ではありませんし、周囲にわたくし達以外の誰かおりますかしら？」

「しませーん。

木に確認してもらつたけどあんたらしか人はいませんでしたー。くそつ、なら一か八かで良心に訴えてみよう。

「おっさんには妊娠中の妻と三人の子供が腹を空かしておっさんの帰りを待つてるんだ」

「子供がお腹を空かせるなんてあなたの罪だわ。無計画で作るからダメなのよ。どうせ養いきれなくて口減らしに捨てるという更なる罪を犯す前にわたくしが断罪して差し上げるわ」

なんか怒られた。

彼女は自分が言つてることが田茶苦茶だと氣付いてるだろ？

「……もういいわ。やっぱり死ぬ間際でないといふ声では鳴いてくれないみたい。殺しなさい」

下される死刑執行の言葉。

振り上げられた剣がおっさんの首へと降りられるのがスローモーションのように緩やかに見える。

終わった。

よくよく考えればすでにおつさんの生は大分前に終了している。

今は何の因果か意識はそのままに新たな生を与えられたに過ぎない。その与えられた生を返還する時が来ただけのこと。

これでおつさんに主人公補正といつものが存在するならば、空から雷が落ちて剣を振り下ろす男に落ちるのだろうが、そんなことがおつさんに起こるわけがない。

あ、でもとりあえず「大樹、東西南北……わりい、おつさん死んだ」とか言つて笑つた方がいいんかな？

しかし、今更間に合わないよね？ どんだけ早口で言わなきゃなんのよつて話だし。

ならば足搔くだけ無駄なのかもしね。

ちょっと理不尽が過ぎすぎて納得出来ない部分もあるが、無理矢理でいいから納得しどう。

理不尽が過ぎすぎ……ぶほつ。

## キンシと甲高い音。

それはおつさんの首へと当たった剣から発せられた。

しかしその剣はすでに元の姿とは掛け離れ、刀身を半ばから失っていた。

辺りに静寂が満ちる。

誰もが起じた事象に唖然として言葉を紡ぐことが出来ない。

そんな中、おひかえの耳には聞も覚えのあの声が聞こえていた。

【ハルドは武具破壊のスキルを得た】

## おひで、捕まる（後書き）

主人公がポジティブ過ぎる……  
作者がネガティブな反動かもしけないっすね

一里は約3・927キロメートル。といつことで千里は約四千キロメートルです。間違いないですよね？

本来の千里眼は遠隔地の出来事や将来の事柄、隠された物事などを見通すことのできる能力とのことです、主人公の千里眼は今のところ遠くがよく見えるだけです。

## おっさん、逃げる

「た、助かった……のか？」

思わず口から声が発せられる。

それはこの場の静寂を切り裂いてその場の全員に正気を取り戻すには十分過ぎた。

「お、おれの剣が……」

細身の男はすく悲しそうな顔でその場に両膝をついた。  
まあ、自分の剣が折れたのだ。大的にしてればしてただけその衝撃  
も大きいだろう。

それにもなぜ剣が折れたのか?  
いや、そもそもなぜおっさんは死んでない?

「あなた……一体何をしましたの?」

少女がその鈴のような声を欺瞞色に染めて聞いてくるが、おっさん  
の方が聞きたいくらいだよ。

何をしたかの問いは簡単だ。答えは何もしていない。  
とゆーか縛られてるんだから何も出来ないと言つのが正しい。  
んじや、どうしておっさんは死んでないのか。  
普通、剣で斬られれば人は死ぬ。

ん?  
剣で……斬る?

あ、斬撃無効だつ!

大樹にもらつた斬撃無効のスキルがおっさんの命を繋いだのだ。

いやー、もうつたはいいけど使つ場面ないし、実感したことにもなかつたからすっかり忘れてた。

「わたくしの間に答えなれー」

おひさんのが思考に耽つていろ」とで返答しないことにマイナーフレッシュするのか、苛立ちの感じられる声音で少女がせつついてくる。

「おひさんが何したかは自分で考えてね」

「むやみやたらに正直に言ひ」ともあるまい。

斬撃が効かないんだつたら槍で突き刺しなさいってなる可能性が高いわけだし。

「くつ、なるほどね。剣が当たる間際に笑つたのは自分が死ないと確信していたのね」

はて？ 剣が当たる間際におひさんつてば笑つたつけ？ そりや、笑つた方がいいのかな位の思考はあつたけど実際には……あ、そういえばくだらないことにウケてたかも。 とつさに浮かんだダジャレほど後々思い返して見るところを寒いことが多いんだよな。

そもそもその話、理不尽が過ぎすぎてなんてダジャレでもなんでもなく、ただ『すき』つて言葉を一つ多く使つただけだ。

「アイリス様、わたしがザラに代わりこの者を処刑しましょー」

あ、まだ諦めてなかつた。

当然か。

次に進み出たのは上半身マッチョな男だった。

ただ……顔がチワワだ。

え、嘘？

何これ可愛い。顔ちつちーゃい。

「いいわ。クピン、やりなさい」  
「御意」

名前も可愛い。

マッチョなのが残念かと思ひきや、それがギャップになつて更に可愛い。

つて、和んでる場合じやねーつー！

ヤベーよ。早く逃げねーと殺される。  
でもビツヤツして？

「ふんつー。」

とりあえずおつさんを束縛する縄に力を込めてみる。

### 【剛力のスキルが発動した】

天の声が聞こえる。意識発動型のスキルは発動と同時に天の声のお知らせがある。おつさんが現状持つてる意識発動型のスキルは千里眼、魔力波、インセクトフォーゼ昆虫形態、そして剛力の四つだ。

スキルを発動させるとブチブチツという音がなつてあつさりと拘束が解けてしまう。

そういうえば、抵抗らしい抵抗したことなかつたけどいつもあつさりといくものなのか。  
最初からやつとけば良かつた……いや、使ってないから忘れてただけなんだけどね。

「逃げちゃダメ。『赤熱の鎖よ 拘束せよ』」

おっさんのおつさんの拘束が解けたのを見た少女が腕を振るつて言葉を紡ぐ。するどいからともなく現れた赤い鎖がおっさんを拘束する。

「あつつい。」

ジューという肉が焼ける音が耳に届く。  
この鎖、熱いなんてもんじやない。

「ウフフッ、その苦悶の顔堪らないわ」

少女はおっさんの顔を見てその表情を喜悦に歪ませる。

「まあ殺しなさい」

「覚悟は良いか？」

「熱いとゆーか痛くなつてきた」

チワワが背中に背負つていた大きな剣を構える。

何キロあるのかわからないほどに重量感タップリの無骨なデザイン。数多の獲物を斬つてきたのか、その刃はところどころ刃零れしている。

しかしそんなことに今のおっさんが注目出来るはずはない。

熱くて痛くて悶えることしか出来ないのだ。ぶつちやけ、チワワが何もせずともこれだけでいざれ死ぬ。

くそー、これが蠅燭から垂れた溶けた蠅ならば「こ褒美なのに……」  
イメージだ、イメージしろ。このあつつい鎖は女王様の賜つたものでしかないんだ、と。あ、大分マシになつてきた。

「そりば」

大剣が振り下ろされる。

「へふっ」

その一撃は斬撃無効のスキルによりおっさんを切り裂くことは出来なかつた。だが、その重量とチワワの腕力でおっさんの体が地面にめり込んだ。

痛い。確かにこれも痛いのだが……

「鎖の方が痛い……」

素直な感想がこれだ。

もつ、マジで拷問だよこれ。まあ、イメージの影響でうつと興奮するけど。

「まだ生きているだと？」

チワワが驚愕している。

驚いた顔がまた可愛いなオイ。

そういうえばさつきまた新しいスキルを手に入れたんだよな。

武具破壊ってことで多少の当たりは付けられるけど具体的な条件とかはわからん。しかし、幸いにも大剣はまだおっさんに接触してゐわけだし試してみる価値はある。

「壊れる」

【武具破壊のスキルが発動した】

天の声とともにチワワの剣に輝が入り、そのまま砕け散った。

「なつー。」

少女、周りの男達から声が挙がる。

おっさんとしては鎖も壊れて欲しかったが残念ながらそうはうまくことが運ばなかつたのは悔しい。

「……なるほど。武器破壊のスキルですか……他者の武器を幾千幾万も破壊したものが至ると言われている境地。有象無象かと思いましたが、存外あなたは武人でしたのね」

「違います」

勘違いもはなはだしいことこの上ない。

おっさんが壊した武器なんて細身の男のものが初めてだ。  
だったら何故おっさんがスキルを得たのかという疑問に突き当たる  
が、得たものは得たのだから仕方がない。細かいことは考えないよ  
うにしよう。

「謙遜は煩わしいからいいですわ。あなたに武器破壊のスキルがあると知れば恐れるに値しませんわ。ドラゴンを殺す前に武器を壊されでは敵いませんから、わたくしの魔法で殺して差し上げますわ」

「ドラゴン、だと？」

いるのか？

いや、ここがファンタジーな世界だというのならいても不思議ではない。

「あら、知らなかつたんですね？　いいえ、違いますわね。あなたも狙つていてしらばつくれてるのですわね？」

「どういう、ことだ？」

「演技がお上手ですね。まあ、あなたの狙いがドラゴン討伐による勇名か魔法具の媒介としての最高級品であるドラゴンの素材なのがはわかりませんけれども目的が同じならばあなたはわたくしの敵。是が非でも殺しますわ。ライバルは少ないほうがあなたはわたくしの敵。「いやいやいや、おっさんドラゴンに興味ねーから」

「ああ、遺言は済みまして？」

聞いちやいねえよ……

くそつ、やべーな。逃げなきやいかんが、剛力のスキルを使用しても鎖が引きちぎれない。それならば昆虫形態を……

「インセクトフォーゼ昆虫形態！」

【失敗。対象に接触する不純物あり。インセクトフォーゼ昆虫形態時分のスペースを確保しろ】

えー……つそーん……

そんな条件があつたんだ。

「何をわけの分からないことを……死になさい。く古の炎よ 全てを滅ぼせ^」

少女の言葉とともにその背後に炎が現れる。

それは雪のように白く、圧倒的な熱量を誇る炎の塊。

しかし、間近にいる少女は汗ひとつ搔いていない。周囲にいた男達は最も傍にいた巨漢の男以外は熱いのか少女から距離をあいている。おっさんにとつて幸いなのは白い炎が現れたその瞬間に体を拘束していた鎖が消えたことだ。これなら逃げられる！

「昆虫形態」  
インセクトフォーズ

【昆虫形態のスキルが発動した】

おっさんの姿がエメラルドグリーンのクワガタへと変わる。  
しかし己くと迫る白き炎はすぐ目の前まで迫っていた。

「うおりやああ！」

火事場の馬鹿力とでも言つのかがむしゃらに羽ばたいて上昇した結果、辛うじて炎の一撃をかわす。

でもその炎の余波は凄まじく、おっさんの体のあちこちが焦げた。

「面妖なスキルを持つてますわね」

空のおっさんへと目を向けた少女が面白いものでも見たかのような微笑みを顔に携える。

「あんたは危ないもん持つてるね」

「危ないなんてとんでもないですわ。魔法ほど高尚な力なんてありませんわ。魔法とは……」

「そうですか。んじゃおっさんは逃げます。あばよ、貧乳」「こら、わたくしがせつかく魔法について講釈をしてあげようつと言うのですから聞きなさい！　とゆーか今なんつった！？」

おお、すっげードスの効いた声。

こりや殺意割り増しだな。

殺されても敵わん。逃げられる時に逃げる。

そもそも人恋しいからと言つて関わって良かつた人種ではなかつた。

「逃がしませんわ。~真紅の魔弾よ 敵を穿て~」

「ぬおつ」

向かつてぐる赤いスーパー・ボールみたいな奴を華麗にかわしていく。  
ふふふ、おっさんがクワガタ姿でどんだけ飛んでもと思つてんだ。  
これくらい避けるのなんて楽勝だ。

「何をしますのー。弓でもなんでも使ってあいつを落としなさい  
つー！」

「は、はいっ」

むおつ、今度は弓矢かよ。

まあ、狙撃ライフルとかがなくてよかつた。さすがにライフルの弾  
はアニメのキャラクターでもない限りはよけらんねーからな。

さて、逃げることに集中しないとかすがにヤバい。おっさんの全  
力、その身に受けやがれ！

なんとか追撃をかわしてながら逃げていると次第にボツリボツリと  
雨が降り、次第に雨足を強くしてきた。

そのせいなのかどうかわからないが、少女の追撃は止み、おっさん  
も一安心といふことで近くの森へと身を隠した。

しかしあれだ。天然のシャワーは有り難いんだが、降り注ぐ雨が強  
すぎて一メートル先も見えない。

どこか雨宿りが出来るところが必要だつ。

おっさんはそんな場所をわざわざ探す必要はない。

ここは森。つまりおっさんのホームグラウンドなのだからそういうの

木にでも適当な場所を聞けば良いのだ。

教えてもらつたのは森の奥地にある洞窟。  
入口は人が一人ようやく入れるほどに狭く、中は先が見えないほど  
に暗い。

熊とかが住んでるわけではなさそうだが、蛇とかがいそうだ。

「ふいー」

人型になつて洞窟に入つたおっさんは入口付近に寄り掛かつて座り、  
大きく息を吐いた。

なんとも言えない体験だった。

まあ、一度殺された身からすればすでに通つた道だと開き直れるの  
だが、やはり問答無用で殺されるというのは慣れないものだ。  
斬撃無効のお陰で斬られることはなかつたが、少女の魔法で火傷を

……あれ？　ない？　火傷の跡がないぞ？　火傷しなかつたのか？  
いやいやいやあれで火傷しないなんてことはありえねーよ。でも  
現に火傷はしてない。

「わけわからんねえ……」

この世界はおっさんの想像を斜めにした出来事がよく起つる。  
だからと言つて自分で考えても埒がない。まあ、難しく考えてもし  
ょうがないのかもな。

誰か説明してくれる人が現れるまで保留にしつづけ。  
今は火傷しなくて良かつたつてことで一件落着。おっさんはハッピ  
ー、はい終わり。うん、これでいい。

それにして腹減つてきたな……

おっさんのが持つていった日保ちする食料なんかの荷物は少女らに捕まつた場所に置いてきてしまった。

森にいけば食べられる物を採集出来るだろうがさすがに土砂降りの中をと言つのは億劫だ。

では選択肢としてあるのは、我慢するか洞窟の奥に行つてみるしかないわけだが、軽率な真似は危険だということを実感したばかりのおっさんは雨が晴れることを信じて待つことを選択したのだった。

## ねつむと、逃げる（後書き）

アニメのキャラクターでもない限りとか同じ架空の存在である小説のキャラクターが言つことに我ながら違和感を覚えています。なーんか次の展開が読めるぞって思われるかもしれません、そいつは胸のうちに秘めといて下せご。

## おっさん、洞窟の中で……

洞窟に入つてからどれくらいの時間が経つたのだろうか。

少なくとも丸一日近くは経とうとしているかもしない。

その間ずっと天候の回復を祈っていたのだが、その祈りは通じず空の機嫌は悪くなつていくばかりだ。

雨が強くなるだけでなく、風が吹きすぎ、雷公様が絶え間無く降り注いでいる。もうこれは嵐と言つても過言ではない。とゆーか嵐そのものだ。

洞窟の入口付近にいては風に煽られた雨が侵入していくので、おっさんは現在、洞窟内をちょっととばかり進んだところにいる。

腹の虫はすでに限界の域に到達しうとうとジワジワと近付いてくるところだ。

たつた一日でと思うかもしけんが、この体は存外燃費が悪いのだ。車で例えるならば一リットルで五キロくらいだろうか。昨今の低燃費の風潮で一リットル三十キロ走る車も開発されているというのに嘆かわしいことだ。

まあ、おっさんが乗つてた車は一リットル十五キロ程度でそれを基準にしてるから、大体人の三倍は食料を消費すると考えてくれ。おっさんが村にいた頃に畠仕事をすることになつたのも、お前はよく食つんだから自分で作れみたいな揶揄があつたからこそだ。

とりあえず、おっさんは人より食うので食料を確保せねば餓死してしまう恐れがあることはわかつて頂けたかと思つ。

そして、外に出るのは天気の都合上無理となれば残る選択肢は洞窟の奥に何かないか探すしかない。

どんな生物がいるか分からぬから危険？ そんなもののこの空腹の前では関係ない。

むしろどんな生物であろうとも不意をついて殺して食つてやるくらいの意気込みを見せなければなるまい。

弱肉強食焼肉定食、所詮この世は食うか食われるか。道具がないから火をおこすことが出来ないのが残念だ。

暗い暗い洞窟を進んでいく。

その歩みは牛歩の如くゆづくりと、細心の注意を払いながら恐る恐るといった調子だ。

この洞窟は内部が入り組んでおり、先を見通すことが出来ないが、身を隠しながら進むにはうつてつけだった。

どれほど進んだのだろう。

入口から計れば大した距離を進んでないかもしないし、もしかしたら結構な距離を進んでいるかも知れない。

そんな曖昧な感覚でしかなかつたが、この光景を見ればそんなことは吹き飛んでしまつた。

洞窟内を進んだ先にあつたのはとてつもなく広い空間だつた。

暗く狭かつた洞窟の中を進んでたどり着いたというのにそこは仄かに明るく、野球場が丸々入る大きさで、天井は見上げるほどに広い。

「ん？」

天井を見上げていた視線を戻すとおっさんの入つてきた道とは反対側に明らかに人の手によるものと思われる扉があつた。

「行つてみるか……」

扉の前に立つたおっさんは意を決して扉をノックしてみる。次いで

「「」めんぐだわー」

声をかけてみたが反応は返つてこない。聞こえなかつたのかと思い扉に手をかけて開けてから中に声をかけることにする。

そして開け放つた扉の中に見たのは確かに人が暮らしていると思われる場所だった。

洞窟の中に作られた住居とも言つのだろうか。

天井は約三~四メートルの高さがあり、通路の幅はおっさんが<sup>トフオーゼ</sup>昆虫<sup>インセクト</sup>形態のスキルを使ってクワガタになつても余るくらいはある。

「すいませーん」

声をかけたがやはり反応はない。

誰もいないのだろうか？ それとも居留守？

どっちにしろ人が来るまで扉の前で待機していいべきではないのか。

しかし、そんな考えは情弱だとばかりに腹の虫が催促する。

おっさん自身も限界が近い。それがおっさんから冷静な判断力を奪つていく。

そしてそのまま扉の内部へとおっさんの足は進んでいった。

扉内部の通路の横には部屋のように区切られたスペースがあり、中を覗いて見れば寝台であろうものが確かにあつた。

その他にも調理場や書庫などの確かに人が住んでいる形跡がある。

「すいませーん。誰か居ませんかー？」

声をかけてみる。

これが住居ならば侵入したのはおっさんだ。

不法侵入など泥棒の所業だ。そんなことは分かつてい。

なのでおっさんは迷い込んだ旅人という設定だ。設定というかそのものなのだが、そういうスタンスをアピールしないと住んでる

人に会つた瞬間に切り掛かって来られそうだ。

あの赤髪少女みたいに人の話を聞かないような人物だつたら出会つた瞬間にアウトだが、あれはわりと稀な例だろう。

「あのー、すいませーん」

しかし、おっさんがいくら声をかけよつとも反応は返つてこない。うーん……とりあえず誰もいないと仮定して調理場を漁りつか。いやいや、そんなんしたらもう言い訳できない。

とりあえず誰かいなかくまなく探してみよ。

いくつもある部屋の中を探してみたが、人の姿を確認することができない。

やはり誰もいないのだろうか。

最後に残つたのは通路の奥にある扉。

他の部屋には扉がないのにここだけには扉が存在する。そのことに微妙に嫌な予感がしないでもないが、ここだけ見ないといつことは出来ない。

生睡を飲み込み、扉に手をかけ開けてみる。

しかし、そこには誰もおらず十畳ほどの空間があつた。

ただし、中がちょっとおかしい。

なんとゆーかファンシーな世界観なのだ。

壁一面がピンク色でぬいぐるみやらおもちゃやらがいっぱい。お、  
幼児が使う滑り台まである。

部屋の中央には普通の三倍はある大きさのベージュベッジリしきもの  
があり、その頭上にはクルクル回るおもちゃ、通称オルゴールメリ  
ーまである。

完璧に赤ちゃんの部屋だ。

ヒューカ品揃えが豊富過ぎてこの部屋の持ち主の親バカ度がよくわかる。

ただ、その部屋の持ち主である存在の姿はない。その代わりにベビーベッドにはダチョウの卵より大きな真っ白い卵が鎮座している。今のおっさんは猛烈な空腹に襲われている。そんな時に卵なんてご飯に合いそうなものを見つけたのだが、こんな部屋に君臨する卵を食材として見ることが出来るのだろうか？いや、わかる。あれは食材として決して見てはいけないものだ。

だけど好奇心がくすぐられてしまるのは仕方あるまい。

一体あれは何の卵なのか。そして卵生の生物におもちゃなどをわざわざ用意するのはどんな人なのかなと疑問が沸いてでてくる。

溢れる好奇心を抑え切れず卵へと近付く。

そしてそつと手を触れてみた。

手触りはツルツルで微かに温かい。

【無色の魔力溜まりを感知。吸収成功】

【ラルドは認識阻害のスキルを得た】

【ラルドは衝撃無効のスキルを得た】

【ラルドは時間遅延のスキルを得た】

え、何？何事？

いきなり天の声が聞こえたけど……

つてあれ？この卵つてこんなでかくなかったよな？

なんか小学一年生のお子さんが丸々入つてそつなくらいに巨大化してんだけど……

あまりの出来事におっさんビックリというか呆気にとらわれてます。

しかし、そんな時間も長くは続かない。  
なぜなら卵にひびが入ったからだ。

「え、嘘？ 生まれんの？ エーっ！？」

「はい、パニック状態です。体が自動的に動き、卵から一歩、一歩と後ずさる。ついで壁へと背中がくつづいた。

そういうしていふうちに卵は割れ、中から出てきたのは卵と回りくま真っ白な体の翼のあるトカゲ。違う。

どう見ても竜だ。

竜はおっさんの見ている前で翼を大きく広げ、辺りをキョロキョロと見回す。

そしてその蒼い瞳がおっさんへと向けられ、ぱちぱちと目が合つてしまつた。

「

竜が何事か叫ぶが、それはおっさんでは判別出来ない。聞いたままを表現すればギャウーだろうか。

竜が口を広げておっさんへと飛び掛かってくる。

生物の親というのは大体が子供のために餌を用意するものだ。実際おっさんも幼虫時代は親であろうクワガタに餌をもらっていた。ならば竜がおっさんのこと親が用意した餌だと認識しても不思議ではない。

「お、おっさんを食べたら腹壊すよー。装甲とか邪魔でしょー！」

理解していないだろ？とは思いつつも必死で弁明を試みる。無駄な弁明をする前に逃げろと思つかもしれないが足が竦んでしまつて動かない。

ファンタジーな世界とは割り切っていてもその象徴たる竜の前ではおっさんの思考など関係なく、いや田の前にしてみると体の方が反応してくれないので。

だが、竜はおっさんの予想に反して田の前で静止し、ねつてこの顔をペロペロと舐め出した。

「ほえ？」

思わずマヌケな声が漏れる。

しかしそんなことは意にも返していないのか、竜のペロペロ攻撃は尚も続く。

うわあ、顔が竜の唾液でベチョベチョだ。

「ストップストップ舐めるのやめなさい」

竜の頭に手を置いて行為を制止する。

ちゃんとおっさんの意図が伝わったのか竜はペロペロするのをやめてくれた。だが、今度は頭をおっさんの胸にグリグリと押し付けてくる。

その……なんだ、もしかしておっさんはじばーの竜の親とか思われてたりすんの？

「おっさんはお前のお父さんじゃないよ？」

そうは告げても理解はしていないのである。  
グリグリ攻撃が止むことはない。

なんとゆーか、いつも懐かれるとおっさんの父性を刺激されるな。  
だがおっさんが親でないのは純然たる事実だ。

それに、本当の親御さんに申し訳ない。

だってベビー用品をこんだけ揃えるくじここの子が生まれるのを楽しみにしてたんだろうから……

「リリーツ！」

その時だ。

扉を蹴破る勢いで一人の女性が部屋の中へと入ってきた。その女性は一言で表すなら美人と言う以外に言葉が浮かばない。髪の色は光沢を持った白で歳をとつて増えて来る白髪とは似ても似つかない。髪の長さは肩くらいで水分を多分に含んでいるのかボタリボタリと髪の先から水滴が落ちている。

どこかのパーティーに出てたんですかと聞きたくなるような艶やかな青のドレスも同様に水に濡れてその肢体に張り付いており、メロン畠と言いたくなるような胸元やむっちりとした臀部をより艶やかに演出している。

「卵が割れる……っ！」

女性は愕然とした表情を浮かべた次の瞬間にこくりと視線を移し、まずは竜の姿を見て頬を緩めたかと思いつきや、ギロツとおっさんのことを睨む。

彼女が部屋の中に入つて初めて真つすぐに顔を見たのだが、少し長めの睫毛や目鼻立ちが綺麗に整つているため、やはり美人である。そしておっさんが勝手に認定した左目の目元にある泣き黒子がやら色っぽい。

ただおっさんを睨んでいるためなのか竜を見ていた時は穏やかで少し垂れ気味だった蒼い瞳は鋭角に吊り上がり、口は歯ぎしりが聞こえてきそうなほどに噛み締められている。

「リリーに何をしたあつ！」

女性が声を怒り一色に染め、おっさんに近付いてくる。  
そして同時におっさんの顔に向かって彼女の握られた拳が迫つてく  
るのが見えた。

あ、これ問答無用で殴られるわ。

## ねつねつ、洞窟の中だ……（後悔や）

おつとじりめで来たって感じです。

ただ、またおつさんが強化されてしまった……

全然戦つてないのにまた防御力アップ

タグがあらすじにて皿を入れるべきなのかどうか……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0990y/>

---

オッサンの異世界記

2011年11月30日18時55分発行